

# 古史傳

自第百十八段  
至第百廿三段

廿三

歷史  
二函  
第一六號  
共二冊

冊	架	函	號	類
四	一	三	一	和
二	三	一	八	書
一	二	五	三	門
一	二	四	二	類

庫	文	閣	內	
二	一	一	一	和
函	冊	冊	冊	書
一	六	一	八	類
六	架	冊	號	

內閣文庫	
番號	和 42518
冊數	40(26)
函號	140 185



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





古事記下三卷

神代卷

平賀山神

男 傳  
女 傳  
傳

於是稻背經命教命也時大寫

主神如其子出辭白給二柱神

表故爾健神言出實神問也





古史傳二十三史卷

カヨノシモツキニキトイフニキ  
神代下三出卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤  
孫 延胤

續攷

八十百

於是稻背脛命。報命出時。大圜

主神如其子出辭。白給二柱神

矣。故爾健御雷出男神。問曰。亦





有<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>白<sup>上</sup>子乎則。大<sup>ニ</sup>国<sup>ニ</sup>主<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>。  
アリベキマラスコヤトバオホクニヌシノカミマラシタマク  
 亦<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>子<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>健<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>。  
マタアガコアリタケニナガタノカミ  
オキテコラハナレトマラシタマフ  
 亦<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>健<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>。  
マタ云ニ健御名方  
 富<sup>ト</sup>神<sup>カ</sup>。亦<sup>マ</sup>名<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>。  
トミノカミトマタノミナハ  
 穗<sup>ホ</sup>須<sup>ス</sup>。須<sup>ス</sup>美<sup>ミ</sup>命<sup>ミコト</sup>。除<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>白<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>。  
フリレモソノタケナガタノカミチビキイハラサゲタナ  
 閒<sup>マ</sup>其<sup>レ</sup>健<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>。千<sup>チ</sup>引<sup>ク</sup>石<sup>ノ</sup>。擎<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>。  
スエニテキテイヒケラクダレゾキワガクニニテシヌビシヌビ  
 未<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>來<sup>ニ</sup>言<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>。誰<sup>レ</sup>來<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>国<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>忍<sup>レ</sup>忍<sup>レ</sup>。

如<sup>カ</sup>此<sup>ク</sup>物<sup>セ</sup>言<sup>フ</sup>。然<sup>シ</sup>則<sup>シ</sup>欲<sup>ス</sup>爲<sup>ス</sup>力<sup>ニ</sup>競<sup>ニ</sup>。故<sup>ニ</sup>我<sup>レ</sup>。  
カクモノイフシカラバムセチカラクラベカレアレ  
 先<sup>マ</sup>欲<sup>ム</sup>取<sup>ト</sup>其<sup>レ</sup>御<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>。故<sup>ニ</sup>令<sup>レ</sup>取<sup>ニ</sup>其<sup>レ</sup>御<sup>ニ</sup>。  
マヅムトトラソノミテライフカレシムレバトラソノミ  
 手<sup>テ</sup>。即<sup>チ</sup>取<sup>リ</sup>成<sup>リ</sup>立<sup>リ</sup>冰<sup>ニ</sup>。亦<sup>マ</sup>取<sup>リ</sup>成<sup>リ</sup>劔<sup>ニ</sup>刃<sup>ニ</sup>。故<sup>ニ</sup>。  
テヲスナハチトリナシタチビニマタトリナレツツルギバナニカレ  
 懼<sup>カ</sup>而<sup>シ</sup>退<sup>ク</sup>居<sup>ル</sup>。爾<sup>ニ</sup>欲<sup>ス</sup>取<sup>ニ</sup>其<sup>レ</sup>健<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>。  
カソレテシリゾキヲリコニムトトラソノタケニナガタノ  
 神<sup>カ</sup>出<sup>テ</sup>手<sup>テ</sup>乞<sup>フ</sup>返<sup>シ</sup>而<sup>シ</sup>取<sup>リ</sup>者<sup>ニ</sup>。如<sup>シ</sup>取<sup>リ</sup>若<sup>シ</sup>葦<sup>ノ</sup>。  
カミノテヲコヒカヘシテトレバゴトトルガワカアレ



ソカミヒレギテナゲハナクタマヘバスナハチニゲイニキカレ  
搯批而投離出則即逃去矣故  
オヒユキテセメイタリレナヌノクニノスハノウミニ  
追往而迫到信濃国出諏方海  
テコロサムトシタマフトキニタケニナガタノカミマラシツラク  
而將殺出時健御名方神白出  
カレコシナコロシタヒソアラオキテココラハジユカアダレ  
恐出莫殺我除此地者不行他  
トコロニマタジタガハワガチ、オホクニヌレノカミノミコトニ  
處亦不違我父大国主神出命

ジタガハアニヤヘコトシロヌレノカミノコトニコノ  
不違兄八重事代主神出言此  
アレハラノナカツクニハマニマアマツカミノミコトノ  
葦原中国者随天神御子出命  
ニタテツラムトマラシタマヒキコハスハノハフリ  
而獻焉白給矣此者諏方祝部  
ガイイツクカミナリコノカミノキサキガミラマラス  
出伊都久神也此神出后神謂  
ヤサカトメノミコトト  
八坂刀賣命



於是は言代主神の青柴垣アラフレガキに隠坐カクリマセるを承と依文カク也。○  
如其子之辭カクソノミコ其子と云。言代主神を依文カク如辭カク之伊比斯  
我ガ基登ゴトと訓べし。○亦有可マタアリベキ白子乎コヤ。マラス。白と云。詔命オホミコト此御答を  
白ハクひおせおす。事代主命の餘ホカも詔命を宣令ノリキカセ聞て其答ミタメ  
白ハクひ心を問聞トヒキクべき子あすやと問あす。○亦我子マタアガコと云。上  
ふ言代主神此おせを言コトひま。今一神ある事を言ふ。如  
まば亦マタと云あす。○有健御名アリタケミナ方神カタガタノカミ。こまを以見アまむ。此神  
も事代主神ツギふ亞ツギて天下イキホヒに威勢あすし。おと知られとす。  
然るを書紀ナリし。ハの於て此神の事コトを記さま。或古事記コトも。  
も上ウヘに大國主神オホクニノカミ此御子コノミコとち字ナリ舉アゲとる中ナカに。此神の脱ヌケと  
るを何ナニか名ナ義ギ師シ説トクふ。健タケまと御ミハ例レの稱名ナリあす。名ナと字ジ  
依事ヨシふ。名ナ義ギ師シ説トクふ。健タケまと御ミハ例レの稱名ナリあす。名ナと字ジ

此如き方カタは宗神天皇ムネノカミ卷クレふ。櫛御方命シノミカタノミコトまと飯イヒ肩カタ巢ス見ミ命ノミコト。  
孝靈天皇の皇子ヒコよ。日子刺サレ肩カタ別命ワケノミコト。是レらの加多カタと同  
加カるカるカ。皆堅ミナカタ此意の稱名ナリよもや有アむ。名方カタと連ツなる例  
は。景行天皇此御孫オホノミコ。大名方王オホナガタノミコ何ナニす。まと允コト恭タカシ天皇オホノミコの御  
女メよ。名ナ形カタ大オホ娘メ皇ミコの御  
女メ。健御タケノミと連ツなる依例ヨシレ。武御雷神タケノミカヅチノカミまと武タケ三ミ熊クマ之ノ大人オホナリあど  
有アり云イハれき。富トミハ字の如くカク例レるカるカ。○御ミ穗ホ須スく美ミ命ノミコト。  
義御タカノミハ稱言タテマツルコトあす。穗ホ須スく美ミと云。今健御雷神の父大神オホノカミは  
言問コトふ時トキしも。此神此穗ホの如く進出スミイデて。力競チカラクシムし給へるを。  
穗ホよとぬをハりて稱ナリせらるカるカ。○除オキテ此者無也コノモノナシと云。子コは例レを  
多サハふカるカ。と云。此事コト問トふべきは。此神コノカミを除オキて。餘ホカも無ナしと



あ。是を以てめ味鉏高日子根神やぐて言代主神ある  
有りてと灼し。もし別神あらましかば味鉏高日子根神  
有りて詔えては。○如此白之間大因主神の如此白給ふ時  
しも。健御名方神物よ。来坐る。○千引石ハ。上よ出  
ぬ。第二十一段の師云。今出雲。因出雲郡。稻佐浦の澳。○  
礫嶋と云嶋あり。土人。うけとい。此嶋いと大死。あ。唯  
一の岩。れ。あ。ま。神代。健御名方神の手末。あ。け。来  
坐。し。千引石。あ。と。云。傳へ。と。○手末ハ。師云。神代紀  
ふ。手端。此。云。多那須衛。あ。り。和名抄。遊仙窟。云。手子師  
らば。あ。手と云。こと。あ。ま。ど。も。此。末。と。云。○擊ハ。師  
を重く見べし。俗言。手さ。死。云。た。れ。じ。○擊ハ。師  
云。刺。舉。を。切。と。る。言。よ。て。此。手。を。高。く。伸。て。其。末。よ。舉。る

を云。俗。手。を。高。く。伸。て。け。て。如。此。爲。て。來。坐。る。故  
は。天。神。の。御。使。來。て。在。こ。を。既。く。聞。給。へ。る。故。己。命  
此。勝。と。る。力。あ。ら。事。示。せ。て。其。御。使。を。懼。れ。し。免。む。と。て  
れ。此。所。為。既。よ。詔。命。よ。○誰ハ。師云。多禮曾と訓法し。曾  
と云。古。雄。畧。天。皇。御。歌。よ。多。禮。曾。意。富。麻。幣。爾。麻。袁。須。と  
言。よ。非。父。雄。畧。天。皇。御。歌。よ。多。禮。曾。意。富。麻。幣。爾。麻。袁。須。と  
あ。り。催。馬。桑。淺。水。多。禮。曾。古。乃。各。加。比。止。太。天。久。留。也。け。て  
此。天。神。の。御。使。あ。る。こ。を。は。熟。知。あ。ら。故。お。ね。お。免。れ  
て。誰。ぞ。を。は。云。れ。如。此。云。ふ。咎。む。る。意。あ。り。今。世。も。人  
ぐ。む。る。よ。誰。忍。く。師云。ま。お。志。奴。夫。と。云。言。古。志。奴。夫  
能。夫。を。云。奈。良。の。志。奴。夫。也。万。葉。集。志。多。布。と。云。よ。同。じ  
末。よ。り。の。こ。と。あ。り。志。奴。夫。也。万。葉。集。志。多。布。と。云。よ。同。じ



堪志奴夫と。堪忍いふ許良閑流。隱志奴夫と。二の意何也。  
 万葉までの歌あざよは戀志奴夫ぞいと多く有て餘の  
 二尤希れ也。古今集と也。以來の哥まと文よと。けて戀志  
 奴夫と。餘此二とを意いと遠くあて。相亘らば本と也別  
 言あるがし。堪志奴夫を隱志奴夫とを近くあて。相通ひ  
 て聞ゆゆこと多し。志奴毘加泥あざ云は堪うぬる意よ  
 されど隱志方は堪志奴夫と也轉れる物あゆほし。そと  
 せまふしき事をも強て堪忍びて押へおけりて忍字を用  
 けしむ意より。隱志ことよもあまざる也。けりて忍字を用  
 ゆめ。堪る意よとれ也。忍ハ字書ふ能也と註せり。能音耐  
 ども云ゆみあ多閑志奴夫あ也。まご殘忍を慘刻少恩也  
 せめ安於不仁也とも注せる也。俗う云ふ氣強く牟吳伎

あり。志奴夫を此意お用とる例をあしされど此も多閑  
 志奴夫より轉れる意あり。心有不安強持不発也。を註せ  
 る也。殊志奴夫と云言よとく當りて隱志意よも近し。  
 まご古書ふ於志を云ふ此忍字を用とるめをはら此意  
 也。あ。此忍は隱志奴夫よ。密字隱字あどの意おて。神  
 武天皇紀ふ密旨繼體天皇紀ふ密奉遣使れぞ有ぐ如し。  
 万葉十二。人目多見眼社忍禮あどよ也也。忍くを重祢  
 とる也。古今集神遊歌よ。陸奥の安達此眞弓我引バ。末さ  
 予依來志能備志能備ふ。此後哥よも詞ふさて如此重祢  
 言ハ。一度のみあらば。遍重ぬる意何也。から籍後漢書ふ  
 れど。そ。此御使も。古事記よて。只一度あまども無又  
 意異あり。重き事を定むる度あまバ。幾度も相見て。左右よ議しこ



と有ぬべし。書紀一書よち一往天よ還りてちて此御使。  
實ハ密隠シヒカクちて議れぬよち非じを己オレ不令聞て議るを  
咎トガ免て忍シユクくふち云ふ也。○物言とは師云是も實ハ此国  
を天神御子よ獻タテマツむや不イヤを問トヒよ來執るとはよく知るの  
ら何事言とも知らぬさほり。故らふた不シ免レぬ言れ也。  
さて此言よ何事ナニコトを云ぞと咎免トガとる意あり上よ誰  
ぞと云ふ其意オノオモを含みて自オノら此処へも響け也。凡て  
此神カミち己オノが勢力イキホヒをぬかみて詔命ミコトノミコトよ從シタガはじと思オホせるか  
ら如カク此言コトふれ也。○然則ハ本ホ然シとあ依ヨを師訓シ師云志  
加良婆カハラバと訓べし。其は上ウヘを承ウケて云言れぬふ。此コト上ウヘ承ウケ  
るよを無ナシて云ふ也。今世の俗語ソコノソコノコトよも事を爲ナサむとけり際キバ

ふ佐良婆サハラバと云ふ同ト。佐良婆サハラバ参マシらう。佐良婆始ハジ免レう。あど  
佐阿サアち佐波サハあり。佐志サシ加カの切キ也。是も言イヒ以モテ行ユクむ。上ウヘを  
承ウケる意オノオモ何ナニ也。誰タレぞ云イハふ云イハふハ咎免トガて故らふ不オホ明ボ免レき  
と依物ヨモツふて。其は我国オノクニを取トルむとて來執キる事コトこそ安ヤスら  
ぬ。と怒イカれると云イハふ云イハふぬ。其心オノココロを以モテ。然我国シカワガクニを取トルむ  
ぬ。ぬらバ。云イハふ意オノオモよ落免オツ也。俗語ソコノソコノコトの佐良婆サハラバも承ウケる意オノオモあり。  
ち其事コトを始ハジ免レむべき構カマも今イマちや。此コト依ヨ意オノオモを承ウケて。然シカ  
らば始ハジ免レむとは云イハふあり。還マシ去サむと云イハふ際キバ云イハふも今イマち言イハ  
はき事コトも言イハふ終ハジり。為ナサべき事コトも為ナサむを了マシて還マシるべ  
也。免レぬ意オノオモを承ウケて。然シカど還マシらうと云イハふ也。○欲ホシ爲ナサ力チカラ  
競マシむ。師云知加良久良チカハラクハラ辨ハ世セ牟ムと訓ツケはし。今イマ云イハふ欲ホシ字ジ牟ムと訓ツケ  
の首卷ウチマキよ委オモ垂仁天皇紀チニテンノキふ。何遇ナニカ強力者チカラコシノヒト而不期シ死生頓得シキニラヒタラシ  
く云イハれと云イハれ。垂仁天皇紀チニテンノキふ。何遇ナニカ強力者チカラコシノヒト而不期シ死生頓得シキニラヒタラシ







に建御雷神の例に奇く靈死徳を以て變化て。御名方神  
を威せ所爲あり。此上の劔鋒より坐下ると同じ意あり。  
縁ある御名方神をめぐ己が絶れと力を以て。此御手  
事ぞ。我取挫ぎも志てむ物と思ひて握持るよ。思ひの外に物  
ふ變化て。さらよ手觸らぬ死故了。驚き懼れて退けるれ  
也。或人は是を疑ひて云く。取成とハ御名方神のみおら  
ず。立氷も那理劔又よ那流とこそ云べし。然成れは成  
よて心もて然委依を云言あり。いづ解て云く。此疑一  
ことり謂たり。されど如此せむと思ひて流る事此さハ  
あらで思ひの外あるさぬ。其例を一つ。古哥よ夏虫  
那須と云とぐひ常よ多し。其例を一つ。古哥よ夏虫  
此身をいぬばらふおはこと。一お思ひよ。古哥よ夏虫  
りりや云るも。自身をいとおらよ。おさむと思ひて。れ  
よ。非妄そを思の。外れをせ。火入る。心らる。

故よ。其火了ていよ。おらよ。あるを。那須と云也。さま  
此も建御雷神の御手を握ら。御名方神の心りて。握られ  
む。立氷よあり。劔又よ。おま。流をも。那須とは云あり。此  
よく。せ。ば。え。混。ひ。ぬ。べ。し。谷川氏。が。立。氷。劔。又。若。輩。等。此。蓋  
其。手。術。名。乃。角。力。止。濫。也。と。云。○退居を師云志理曾伎  
る。上。代。の。意。よ。非。妄。非。説。あり。○退居を師云志理曾伎  
袁理と訓べし。曾伎ハ遠離るまとお也。登保曾伎とも  
也。仁徳天皇。卷黒比賣。哥。お。ち。て。後。方。牙。曾。久。を。志。理。曾。久  
也。曾伎袁理。登母とあり。ちて後方牙曾久を志理曾久  
也。云。故。古。よ。ゆ。退。字。を。然。訓。也。居。ハ。此。を。語。の。終。お。れ。む。袁  
流と云そ訓はきよ。袁理と訓むを如何と。後世此心おは  
思を流るるれど。此を有也。同格よ。活用言ふて。語の終よ  
ても。袁理と云也。云。袁流と結る。上。曾。ま。と。夜。お。ど  
古今集小町歌よ。胸走火よ。心焼を也。乃云く。幡幢尔居こ



れめ古言を多く辨  
了て袁理とを訓り。土佐日記よ。黒鳥といふ鳥。岩のうす  
不集は正をゆ。伊勢物語。男弓やれぐひを負て戸口ふ  
を正。云くと思ひを正。竹取物語よ。かとおれを正。あど此  
餘もいぞ多し。○乞返とは。師云初。不建御名方。神まは。建  
御雷神の御手を取むを乞て取おる如くよ。建御雷神も  
ま。御名方。神の手を取。年と乞賜ふを云。歸とは。凡て彼  
方とゆ爲し如くよ。ま。此方と正も爲は。云。あ。○若  
葦。師云易く所摧る物の譬あり。葦ハ竹あどの如く。た  
牢。うらぬ物あるふ。若きは殊。不脆。れ。れ。正。御名方。神  
引石を撃る。ば。う。り。の。力。ある。を。如。此。○搯。批。は。師。云。都。加  
云。建御雷神。此手。力。此。不。知。べ。し。○搯。批。は。師。云。都。加

美比志岐氏と訓る。搯。批。説文よ。捉也。廣韻。持也。と註し。  
也。廣韻。拳。加。人。也。如。取。若。葦。と。譬。これ。必。比。志。岐。あ。ぢ。  
云。ほ。き。處。あ。正。二。字。共。よ。比。志。具。と。訓。へ。き。義。を。見。え。ざ。れ  
義。よ。ら。だ。二。字。を。登。理。氏。あ。ど。く。訓。は。り。○。投。離。也。則。ち。  
れ。ど。さ。て。は。此。處。の。あ。り。さ。ま。よ。叶。を。ば。○。投。離。也。則。ち。  
上。よ。蹶。離。遣。矣。と。あ。る。を。同。じ。趣。あ。正。○。追。往。ち。御。名。方。神。  
此。力。ふ。い。よ。く。驚。き。懼。れ。あ。ら。も。猶。逃。遁。れ。て。服。從。さ  
る。が。故。い。追。往。と。る。ふ。形。正。○。信。濃。國。名。義。ハ。山。國。よ。て。級  
坂。の。依。故。の。名。あ。正。と。岡。部。翁。説。あ。正。外。不。此。國。名。の。こ。と  
は。余。が。別。よ。思。得。と。依。解。あ。正。神。武。天。皇。卷。伊。勢。津。彦。命。此  
處。正。註。は。し。高。橋。舍。人。説。よ。御。名。方。命。越。後。ハ。御。母。の  
國。あ。る。故。よ。其。へ。行。り。む。と。て。信。濃。へ。を。逃。給



ひらむと云也。○諏方海諏方ハ和名抄云。信濃国諏方波須然も有べく也。

郡是亦也。方字訪とも加り也。古事記云。師云續紀云。養老五年

六月辛丑。割信濃国始置諏方国。天平二年三月乙卯。廢諏

方国并信濃国とあ也。かくれむ古は。一国よも置むか也

廣き名ありむ。名義嘗よいはぐ。須夫麻理の意小もや

有む。夫麻を切れば。婆あるを清音よ轉じ。理を省るる也

須夫を須夫。其由は此次の詞よ見也。海ハ湖也。此湖の

書よ。周六十四里二十一歩と云。袖中抄よ。信濃国此

夜通ひ給ふ。ち宮と申をん。亦神のものと云。此海ハ

かち。已と云。侍る。春と云。氷を。と云。給ふ。西行

家集云。春を。ま川。春の。見えて。春と云。氷を。と云。給ふ。西行

ふとけ。然つら。掘川。百首。頭仲。哥ふ。此の。海氷。の橋

立。冬。の。節。よ。至。て。彼。堅。凍。う。あら。夜。よ。氷。鏡。此。如。し。

又。氷。を。ら。ち。漁。去。る。よ。ハ。腰。よ。長。き。竿。を。挟。む。も。し。あ。や

ま。て。落。入。時。も。竿。ふ。て。死。を。道。は。く。とい。へ。か。ら。ぶ。凡。て。古

神。渡。を。狐。あ。り。あ。ど。云。云。狐。聽。氷。と。い。へ。か。ら。ぶ。凡。て。古

は。湖。を。も。某。湖。と。ハ。言。て。某。海。と。云。る。例。也。今。云。此

信。子。然。る。説。あ。ら。神。世。と。後。世。を。甚。く。地。形。の。変。り。物

海。ぬ。あ。く。あ。ら。信。濃。国。を。後。に。こ。そ。は。い。や。高。き。固。と。変。り。て

れ。然。る。也。此。固。の。當。時。ハ。海。あ。り。て。神。名。帳。よ。穂。高。神。社

王。依。毘。賣。神。社。氷。鏡。斗。賣。神。社。あ。り。て。海。神。の。御。末。あ。る。神。社

是。と。多。く。一。里。む。り。探。ぬ。る。小。縣。郡。あ。り。海。野。村。と。云。あ。り。神。社



を潮尻といふ俗に千久麻川もと海ありしと云り其  
水上に海瀬村海口村ありて其辺より千久麻川  
子流る甲斐國の堺なりやいす然ればいと上代も  
海ありしや海あき國と變らむも知れらば若然も  
らば今此湖を其残れる處にぞ有べきはと万葉甲斐國  
甲州志あども見えとて海ありやと思ふこと甲陽軍鑑  
あふ海と云ふ事も有れど猶よく考ふはし湖をさして  
みれり。ちて此の諷方と此を云交して海としも云る  
は道の所限ハ逃賜ひたる。此湖北岸ふ至て終ふ  
道絶て逃べき處なく窮れ依由り。追到と云る即其  
意あり。凡て世年留を挾むるあり。世麻留を挾カス有れば  
かの須夫麻理も此神の追迫らきて此處窮まて賜へ  
依由れ名よめやと思ふあり。○恐也。こまも上れ言代主

神の御言ふ恐也此國者云くとあると同意あり。隨天神  
御子之命獻と云處子係れる言あり。莫殺我と云よかけ  
○除此地者云くかく白賜へてしはくよ。遂に此諷方ふ  
鎮坐せり。○大國主神也命事代主神也言とあるは本よ  
ての語ふ差ありしれり。○兄を和名抄ふ。日本紀私記云  
伊呂禰とあり。伊呂禰とはまはは同母兄を稱と聞ゆれ  
ど。書紀も然らぬ兄をも訓れど。前ふて伊呂泥を訓し  
ぞ。語調ころけまむ常の如く阿邇と訓べし。阿邇と云も  
とは既し第七十六段に註せり。ちて此兄字ハ天神本紀  
にも此傳を記せるに兄字あるに依れる由也。既し徴ふ  
云へ。○隨天神也命而獻師云。建御雷神いまど此神は



詔命を宣聞せ給ひし事也。上ふ見えざれども其れ上文  
ふ譲りて畧々依物うて。實ハ既も此神も宣聞せ給ひ  
しあるべし。故今如此白し給ふ也。書紀も此健御名方  
棄て記されざる。○諏方祝部。祝部を波布理と訓む。委く  
はいつるよぞ也。傳見るべし。ちて諏方祝のこぞ。文  
を既ふ上よ註へ也。第四十四段の  
徳天皇紀ふ。仁壽三年從二位健御名方富命。前八坂刀賣  
神祝。預於把笏とあるよ也。外ふ見當らぬ。委く其社傳  
を尋ぬるよ。まお大祝と云ありて。諏方氏也。健御名方  
命の御裔ふて。血統絶び。御中世よ男子あくて。村上天皇の  
云人を女よ嫁せて。聳よあはる事あり。是を御衣祝有員  
王と系圖ふあり其後も男子あく。別家より継ぬる事も

あれど女よ聳と為。祖神の由緒よよめて。代々諏方地よ  
とるありと云り。外ふ出依おとぬ。因人此言よも諏訪神ハやがて大  
ふ代替よを京よ使者を物して。御装束所よ。装束を請し  
むる。彼所より其由多奏せむ。金中子の冠と。黄櫨漆の  
御衣を賜ふ例也。此とぞ。此は何の世よりぞ。云こぞを  
らび。我徒青木並房ハ彼因の人ふて。此社此事ども委く  
知れる。大祝やがて。諏訪神と崇むる。はう也。此事おれむ。神孫  
來れ。然も有。と云。はと神事よも預ぬること。れき物とぞ。多  
彼謂也。御柱祭の時。此。奉よて出る。おと。れども  
社地の真中。吳牀。ふ腰打うけて。社人等。ま。と詣とる。諸  
人。此拜を受。儲ま。と神長官と云。あ。也。て。神社の事を統領  
也。次。ふ禰宜大夫と云。あり。其次。了。權祝。長坂。擬祝。伊藤。副  
祝。氏。矢。鳥。を云。ありて。長官以下を總て。五官と云。由。あり。其



外の社人いと多加也。長官と祿宜大夫との家を、守屋を  
子馬子あざ、戦ひて敗れ、其子孫此の神孫よ仕、さるが  
因よ下り、諏方地よ止りて、其子孫此の神孫よ仕、さるが  
終ふ神長官とも、祿宜大夫ともありて、連綿たり、本社  
後、おる山頂よ、守屋社ありて、其山を守屋山と称ふよし。  
長官の家、の古記よ、具よ記し、傳へ、さりとぞ、守屋大連ハ  
討死せられ、さるごと、書記よ、委く見え、さるごと、如くあまむ。  
此地よ、遺れ、さるごと、云ふ、覚束無れど、其子等、を、諸因よ  
散去れ、由見え、さるごと、此よ、遁きて、建御名方、神の御裔  
此、此地を領る、さるごと、仕、守屋社を、此、地よ、建、終  
伊勢津彦命、の、此、因よ、逃下りて、止、ま、れ、る、を、思、ふ、古、  
地よ、甚く、追、追、れ、て、建、御、名、方、神、の、古、例、此、ま、お、く、當  
因へ、遁、ゆ、く、事、よ、て、此、因よ、遁、れ、て、は、強、て、探、下、諏、訪、社、の  
求む、る、こと、を、も、為、さ、る、例、あり、し、あ、る、べ、し、下、諏、訪、社、の  
祝、武、井、村、を、云、ふ、住、也、を、武、井、祝、とい、ふ、手、塚、氏、あ、也。  
昔、木、曾、義、仲、朝、臣、の、軍、よ、從、ひ、斎、藤、實、盛、を、討、取、れ、る、手、塚、  
太郎、光、盛、と、云、し、ハ、武、井、祝、れ、る、が、義、仲、の、軍、を、起、し、時、よ、

諏訪社、亦も、軍士を、催促し、れ、む、彼、社、此、盛、あり、し、程、を  
る、故、よ、光、盛、を、陣、代、と、し、て、軍、兵、を、出、せ、る、よ、て、今、の、武、井、  
祝、や、が、て、光、盛、の、裔、あり、と、其、ち、て、此、武、井、祝、を、長、官、を、し、  
家、の、系、図、よ、委、く、記、せ、也、を、ぞ、  
て、彌、宜、大、夫、よ、り、下、四、の、祝、も、有、て、同、く、五、官、と、稱、ふ、と、ぞ。  
此、も、彼、並、房、が、説、ると、ま、と、餘、  
の、人、よ、も、探、秘、て、記、せ、る、あり、  
○伊、都、久、神、也、伊、都、久、を、上、  
ふ、出、と、也、  
傳、見、る、べ、し、  
○八、坂、刀、賣、命、を、建、御、名、方、命、  
此、后、神、あ、る、こ、を、下、ふ、引、く、御、紀、の、文、ふ、て、知、さ、る、が、誰、神、  
の、御、女、と、云、ふ、と、知、が、と、し、名、義、八、坂、は、彌、榮、あ、ゆ、べ、し、刀、  
賣、此、を、也、を、既、ふ、註、へ、也、  
第、四、十、六、段、の、傳、見、べ、し、  
ち、て、此、夫、婦、神、の、社、  
を、神、名、式、よ、信、濃、因、諏、訪、郡、よ、南、方、刀、美、神、社、二、座、  
大、名、神、と、  
あ、る、御、社、是、あ、也、  
主、神、を、建、御、名、方、神、前、一、座、を、八、坂、刀、上、  
賣、命、あ、る、こ、と、下、よ、註、へ、ゆ、が、如、し、











知べし。けりて諏訪神よ建と云る。あつ前よ例見え。けりて  
又從三位建御名方富命。命をあゆむ。水内神あり。前八坂刀  
賣命とある。詠 同年二月十一日。授信濃。因從二位勲八  
等。建御名方富命。神正二位。正三位建御名方富命。前八坂  
刀賣命。神從二位。訪神あり。正三位建御名方富命とある。  
水内神あり。前八坂刀賣命とある。同七年七月三日。信濃  
因諏方郡水田二段。爲彼。因建御名方富命。神社。田。あつ後  
ど。諏訪社の。同九年三月十一日。信濃。因正二位勲八等。建  
御名方富命。神進階。從一位。從二位建御名方富命。八坂刀  
賣命。神正二位とあり。師云。右因史よ載れる。諏訪神と水  
内神と。神号同く。まゝと諏訪の。神  
まぎら。はしく。あて。位階をもひぐ心得せ。依人もある。故

よ。今委曲よ。あつて師説よ。水内社を。右此如く。古は諏訪  
依し。明らめ。あつて師説よ。水内社を。右此如く。古は諏訪  
社よ。並ぶ。ば。り。此名神大社よ。坐し。今世。其社の詳  
あらぬ。甚く不審。死。けり。あつ。式内と云へど。絶。る。も  
諸因は。多。う。れ。ど。さ。げ。ぐ。よ。か。ば。り。の。大。社。此。其。と。知。れ  
ぬ。今。思。ふ。よ。戸。隱。も。さ。ば。り。由。ある。神。と。聞。え。と。依。よ。式  
よ。も。載。り。凡。て。古。書。よ。見。え。ざ。り。由。ある。神。と。聞。え。と。依。よ。式  
む。け。て。其。戸。隱。を。手。力。雄。神。あり。と。云。傳。へ。と。る。此。建。御  
名。方。神。も。千。引。石。を。手。末。よ。指。挙。依。む。り。の。手。力。あり。し  
神。よ。し。坐。す。手。力。雄。神。あり。と。云。傳。へ。と。る。此。建。御  
社。中。昔。より。例。の。佛。ざ。と。此。み。主。と。あ。ま。く。バ。本。此。神。名。も  
社。号。も。失。ひ。あ。つ。と。言。れ。ま。と。玉。勝。間。よ。事。代。主。神。と。建。御。名  
方。神。と。を。共。よ。大。因。主。神。の。御。子。此。中。よ。殊。よ。威。勢。盛。あ。る  
神。よ。坐。あ。つ。を。事。代。主。神。は。天。神。の。詔。命。を。畏。み。て。速。よ。服



從<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>乃<sup>リ</sup>ひて。永<sup>ク</sup>皇<sup>美</sup>麻<sup>命</sup>のやぶをあき守<sup>ル</sup>神<sup>ト</sup>とて。大  
倭<sup>國</sup>小<sup>所</sup>くよ鎮<sup>座</sup>て。朝廷<sup>ト</sup>に重<sup>ク</sup>祀<sup>給</sup>ひ。神<sup>祇</sup>官<sup>の</sup>八  
柱<sup>神</sup>此<sup>中</sup>ふも。祭<sup>給</sup>へ。建<sup>御</sup>名<sup>方</sup>神<sup>は</sup>。大<sup>命</sup>ふ從<sup>ひ</sup>給<sup>さ</sup>ざ  
すしを。信<sup>濃</sup>國<sup>の</sup>諏<sup>訪</sup>まで追<sup>攻</sup>て。殺<sup>さ</sup>むとせし時<sup>よ</sup>。此  
處<sup>ヲ</sup>除<sup>て</sup>。他<sup>處</sup>よを往<sup>じ</sup>と申<sup>給</sup>へ。故<sup>古</sup>は信<sup>濃</sup>の諏<sup>訪</sup>  
水<sup>内</sup>あどを放<sup>て</sup>。他<sup>ふ</sup>は祭<sup>る</sup>社<sup>も</sup>をち<sup>く</sup>聞<sup>え</sup>ざすし  
ら。然<sup>る</sup>よ今<sup>の</sup>世<sup>中</sup>よを。諏<sup>訪</sup>と號<sup>け</sup>て此<sup>神</sup>を祭<sup>る</sup>社<sup>國</sup>  
國<sup>ふ</sup>彼<sup>此</sup>有<sup>て</sup>。信<sup>濃</sup>あるは更<sup>よ</sup>も云<sup>は</sup>。其<sup>社</sup>何<sup>ま</sup>もほ  
どちよよ榮<sup>え</sup>給<sup>ふ</sup>を。事<sup>代</sup>主<sup>神</sup>を祭<sup>る</sup>社<sup>を</sup>。古<sup>の</sup>もみれ  
衰<sup>給</sup>ひ。其<sup>外</sup>ふは。後<sup>よ</sup>祀<sup>給</sup>ふ社<sup>も</sup>。字<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>聞<sup>え</sup>らる<sup>あ</sup>

巴。今<sup>云</sup>此<sup>師</sup>說<sup>一</sup>。巴<sup>は</sup>然<sup>思</sup>て依<sup>ま</sup>ど。猶<sup>と</sup>く思<sup>予</sup>ぞ。  
と上<sup>代</sup>を。諸<sup>國</sup>ふ多<sup>く</sup>あるは。中<sup>古</sup>より。の事<sup>よ</sup>て。多<sup>う</sup>  
依<sup>り</sup>。本<sup>は</sup>決<sup>て</sup>。阿<sup>須</sup>波<sup>神</sup>を祭<sup>る</sup>社<sup>を</sup>。彼<sup>神</sup>の  
あど。の社<sup>此</sup>盛<sup>み</sup>あり。名<sup>高</sup>き故<sup>よ</sup>。混<sup>ひ</sup>來<sup>つ</sup>ると。知<sup>ら</sup>  
れ。ふ中<sup>よ</sup>も。後<sup>よ</sup>宮<sup>所</sup>と。須<sup>波</sup>神<sup>あり</sup>。建<sup>御</sup>名<sup>方</sup>神<sup>を</sup>祭<sup>る</sup>  
べき。由<sup>無</sup>き。郡<sup>是</sup>決<sup>て</sup>。阿<sup>須</sup>波<sup>神</sup>あり。建<sup>御</sup>名<sup>方</sup>神<sup>を</sup>祭<sup>る</sup>  
て。下<sup>總</sup>國<sup>香</sup>取<sup>郡</sup>。川<sup>村</sup>と云<sup>ふ</sup>。外<sup>れ</sup>に。思<sup>ひ</sup>を。古<sup>き</sup>  
社<sup>あり</sup>。て。諏<sup>訪</sup>社<sup>とい</sup>ふ。此<sup>村</sup>の。水<sup>帳</sup>ま。其<sup>社</sup>よ。傳<sup>え</sup>れ  
る。古<sup>文</sup>章<sup>あ</sup>ぞ。阿<sup>須</sup>波<sup>神</sup>と。須<sup>波</sup>社<sup>と</sup>も。有<sup>と</sup>ぞ。ま  
と。此<sup>五</sup>位<sup>下</sup>と。思<sup>予</sup>ぞ。御<sup>紀</sup>よ。貞<sup>觀</sup>十<sup>二</sup>年<sup>八</sup>月<sup>出</sup>雲<sup>國</sup>須<sup>波</sup>  
神<sup>從</sup>。五<sup>位</sup>下<sup>と</sup>。阿<sup>須</sup>波<sup>神</sup>を祭<sup>る</sup>社<sup>を</sup>。依<sup>り</sup>。衰<sup>へ</sup>る。事<sup>中</sup>世<sup>よ</sup>  
べし。儲<sup>ま</sup>と。事<sup>代</sup>主<sup>神</sup>を祭<sup>る</sup>社<sup>を</sup>。依<sup>り</sup>。衰<sup>へ</sup>る。事<sup>中</sup>世<sup>よ</sup>  
巴<sup>の</sup>弊<sup>ある</sup>。古<sup>の</sup>社<sup>を</sup>祭<sup>る</sup>社<sup>を</sup>。依<sup>り</sup>。衰<sup>へ</sup>る。事<sup>中</sup>世<sup>よ</sup>  
よ。載<sup>れる</sup>。社<sup>を</sup>祭<sup>る</sup>社<sup>を</sup>。依<sup>り</sup>。衰<sup>へ</sup>る。事<sup>中</sup>世<sup>よ</sup>  
諸<sup>國</sup>ふ。あき。國<sup>を</sup>祭<sup>る</sup>社<sup>を</sup>。依<sup>り</sup>。衰<sup>へ</sup>る。事<sup>中</sup>世<sup>よ</sup>  
申<sup>し</sup>。ま。諸<sup>國</sup>ふ。あき。國<sup>を</sup>祭<sup>る</sup>社<sup>を</sup>。依<sup>り</sup>。衰<sup>へ</sup>る。事<sup>中</sup>世<sup>よ</sup>  
き。趣<sup>ふ</sup>。て。其<sup>外</sup>ふ。在<sup>る</sup>。社<sup>を</sup>祭<sup>る</sup>社<sup>を</sup>。依<sup>り</sup>。衰<sup>へ</sup>る。事<sup>中</sup>世<sup>よ</sup>



事代主神あるが多うればいと上代よ此神を世人の崇  
先祀す依事の盛ありしこそ知べし。ちて假令本を他神  
あるも其神と申して然あしらすば其本を正す神ハ  
と深く静坐して今称して祀る神の替り立て。験を現  
例も阿須波神の奥よ静りて。諏訪神の前よ  
も立て。榮え給ふ社もまよ少のらじとぞ思え候。そも  
そも天神此詔命ふ服ひ給ひて。朝廷此御守神とあす給  
す依神の御社を皆あう衰す坐て。詔命よ従ひ給えげり  
し神此御社しも多うれびて。榮え坐候を何ある事お  
有む神の御所爲は。世よ理量す難き物ぞ有け候。然れ  
ど此をいづく思合さ候。事無ふしも非ざるむ。と有  
す。おは皆理お論おすかし。會津人佐藤忠満説よ。或人  
ゆと云きといす。此説さも有べし。余も思ふ旨ありて。  
豫て記し置候る物あり。其は事長れむ。此了出さる。

於、ニ、タケ、ミ、カヅ、チ、ノ、ヲ、ノ、カ、ミ、サ、ラ、ニ、マ、タ、カ、ヘ、リ、キ  
於是健御雷出男神。更且還來  
テ、ト、ヒ、ソ、ノ、オ、ホ、ク、ニ、ヌ、シ、ノ、カ、ミ、ニ、タ、マ、ハ、ク、ナ、ガ、コ、ド、モ、コ、ト  
而。問。其。大。因。主。神。曰。汝。子。等。言  
シ、ロ、ヌ、レ、ノ、カ、ミ、タ、ケ、ミ、ナ、ガ、タ、ノ、カ、ミ、フ、タ、リ、ハ、マ、ニ、マ  
代主神。健御名方神。二神者。隨  
ア、マ、ツ、カ、ミ、ノ、ミ、コ、ノ、ニ、ジ、ト、タ、ガ、ハ、マ、ラ、シ、ラ、ヘ、ヌ、カ、レ  
天神御子出命而。不違白訖。故  
ナ、ガ、コ、ロ、イ、カ、ニ、ゾ、ト、ト、ヒ、タ、マ、ヒ、キ、コ、ニ、コ、タ、ヘ、マ、ラ、シ、タ、マ、ハ、ク、マ、ニ、マ  
汝心奈何問給矣。爾答白出。隨











此事代主神渠帥として。諸神の前ふとち後ふ立て。天神御子を守護奉仕らむを承て。天武天皇紀に。高市社に坐して事代主神と牟狹社に坐して生靈神と二柱。高市縣主許梅小著て。吾者立皇御孫命也。前後以送奉于不破而還焉。今且立官軍中守護也。と詔へる事をも思合はる。是よ御孫命之前後とあるよ依らむ。此の神は御尾前も即天神御子の前後を云ことりとも見ゆれども。けりは非は彼前後を事代主神を生靈神を二柱。此神後世まで神祇前と後とよ立とるふ由あるべし。官の八神は列ふも入て。祭られ奉賜ふも。全天皇は大神を守護奉仕るふ由縁ありとあり。あふ是等のことはも委く云。けりて此事代主神も現御身を既ふ隠坐おむるが如し。

此よ正後御守護と承て。奉仕に給はむとあるは。幽冥をけり。靈幸に賜ふ由縁を明をせし。○不有違神とハ。吾子等百八十神は中よ。一柱も違ひて。背に奉仕を有じぞ。及て百八十神者と云を。此に係て見ばし。

於是大国主神。白皇美麻命出

將靜坐大倭国而己命出和御

魂取託八咫鏡而倭大物主櫛



三カタマノミコトトタヘミナラテマセオホミワノ  
甕玉命稱名而令坐大三輪出

カミナビニオノレミコトノミコアダスキタカヒコ  
神奈備已命出子味鉏高日子

ネノミコトノミタラマセカヅラキノカモノ  
根命出御魂令坐葛木出鴨出

カミナビニコトシロヌレノミコトノミタマラマセ  
神奈備事代主命出御魂令坐

ウナデノカミナビニカヤナルミノ  
宇奈提出神奈備賀夜奈流美

ミコトノミタマラマセアスカノカミナビニ  
命出御魂令坐飛鳥出神奈備

テアマツカミノミコトノチカキモリガミタマツリ  
而天神出御子出爲近守神貢

オキタマヒキノアミノコトシロヌレノミコトハアスカノ  
置給矣此天事代主命者飛鳥

アタヘニガランガヒトラガオヤナリ  
直長柄首等出祖也

此段ハ出雲國造グ神賀詞ある傳を採て記せること既  
小徴了委く云子也。○皇美麻命ハ天忍穗耳命を指て白



し賜へ也。本よ皇御孫命とあるを、後の意をもて當とる字あること。上よ委く辨へとるが如し。○  
將靜坐大倭国靜坐とを大宮造也して。今よ也住給をむ  
事を云あり。大倭国を畿内の大和国を詔へめ。抑此間  
はふ布未皇美麻命此大和国ふ宮敷坐むとは。天皇祖神  
多ちも議定免給をさ依時あるよ。此大神の如此しも詔  
牙依を彼国ハ本よ也。後ふ皇美麻命此宮敷坐べき地と。  
彼国作の時とめ。心了含みて作也設り給へ依あるはし。  
是を以ても大国主神の国作り給ふ布とより。終よ此御  
国を美麻命よ避奉りて己命を幽冥よ隱坐むと思ひ決  
免給へめと云説此誣説。神武天皇紀よ昔伊弉諾尊日此  
ふらぬ由を辨ふべし。日本と書  
国曰日本者浦安国細戈千足国磯輪上秀真国

七畿内の大和国のおとある由也。師復大己貴大神。目也  
此国号考よ委曲よ辨へられとり。復大己貴大神。目也  
曰王牆内国とあるを合せて思ふよ。本よ也幽き契ある  
事あ也加し。○己命を於能禮美許登と訓べし。此語あ  
ふ始免て見えと也。他人のう牙を云をたよ。己云くと  
言はき詞を神まと貴人此上了は尊みて申は語あ也。○  
和御魂の事ハ既よ註す也。第二十七段の傳見るべし。 けて大国主神  
此和御魂を大三輪ふ坐は大物主神あ也。此神の事ハ既  
ふ上了出と也。第九十五段見るはし。 ち本下ふも註ふを見よ。○ハ  
咫鏡といふ鏡の状也。既よ天照大御神の御靈代也。八咫  
鏡の處よ委く註へ也。第四十五段此傳見るべし。 胸形邊津宮ふ坐は



比賣神ヒメノカミ神體カミノミタも。八咫鏡ヤスヒノカミあること上り見也。第三十六段 見るべし  
けて取託トルカケを。登理都トケと訓べし。託カケを付ツケの義カケふ書カケあよて  
其和魂ニギハヤヒを此鏡コノカミに寄憑ヨセツケあるへ依由ヨリあり。○倭大物主ヤマトノウヂノミコ櫛シ懸カケ  
玉命タマノミコ師説シラヒふ。此御名コノミコノナを美和ミワに鎮坐シヅカに御魂ミタマの御名ミコノナよし多。  
大罔主オホノミナ神カミの一名ヒトナふは非ヒ倭ヤマト大物主オホノウヂノミコと有アルふても知チげし。  
故古事記コトコトニ。大罔主オホノミナ神カミ此亦コノカミ名ナどもを舉アゲとる處トコロハ。此御  
名ナを出デさばオホカミ大方古書オホホカミこみ此御名コノミコノナは美和ミワふれみ申マウシせ也。  
須佐之男スサノヲノヲ命ノミコトの出雲イセノ比熊野ヒクノ祭マツルる御名ミコノナを櫛シ御氣ミケと言イハ  
野命ノノミコトと申マウシ類ルて美和ミワ社ヤシロよりぎれる御名ミコノナあり。と言イハ  
れはと大物主オホノウヂノミコと申マウシに御名ミコノナは高皇產靈タカミムスヒノミコト神カミの賜タマヒへる御名  
あるアルはし。をも言イハれしを信シよ然サレこをコトあ也。其由シヨを第百二  
十八段ヒトヤチハチに註ツキす

見ミ然サレるふ取トルては此大罔主オホノミナ神カミの御自稱ミカラダクへ給タマヒりゆと  
あるは何ナニあらむと云イハふ。此時コトノトキ尔自稱ニカラダクへ給タマヒりゆを櫛シ懸カケ玉タマ  
命ノミコトと申マウシに御名ミコノナありむ。後ノチに産靈ウツスヒノミコト大神オホノカミ此賜タマヒりる大物  
主ウヂノミコトを申マウシに御名ミコノナと一連ヒトツヅキに傳ツタへる物モノ也。例タトヘを云イハは正哉マサニ吾  
須佐之男スサノヲノヲ命ノミコトの御荒ミヤよむ也。忍ニギハヤヒ穗耳ホミミ命ノミコトは負ツグ坐カる御名ミコノナを  
合アせて。正哉マサニ吾勝ミカチく速ハヤ日ヒ命ノミコトともある。二の御名ミコノナを  
命ノミコトと稱ナヅケし奉マツルるをも思オモひ合アはせし。けて櫛シハ奇クセあり。懸カケを  
甕ツツ速ハヤ日ヒ甕ツツ榎ヱノなどの甕ツツも同ナニく。嚴イカに通ツふ詞コトバ玉タマは御靈ミタマの借  
字カタ也。○大三輪オホノミ之ノ神カミ奈備ナヒ大三輪オホノミのこを既イに註ツキへ也。  
第九十五段ヒトヤチイハチの岡部翁オカベノオノ云イハふ。神奈備カミナヒハ神カミ此毛理モリあり。毛理モリは  
約ツグは美ミふて神カミ奈美ナミあはを通ツはして備ヒと云イハふ。万葉マンヤフよ。毛



理字神社とも書かれぬ。此も大三輪此神社と云意なり。  
前よ神奈備ハ神の戸にて上代と云其神社よ寄られ  
とる神戸田の地。即其神室もある故よ。云々と  
ひしうど神戸を其民也。○令坐ハ。本ハ坐字麻勢を訓  
ばし。書紀の訓小多々見えぬ。令坐ハ佐勢を約けり。此  
大物主神也。大三輪よ鎮坐る由縁ハ。やぐて此神の御託  
ふて。既く祭に給へること。上よ見えと依如くぬる。九第  
十五段の傳。此了是時坐奉に給へり。とあるは違へ依り  
見るべし。似とれど然よは非也。彼時了を多々詔ふはなく。社を  
作りて祭に給へると聞ゆる哉。是よに後を皇美麻命の  
近守神と立奉り給ふ依故よ。己命の御魂あつらも別よ

稱名を奉にて。新よ八咫鏡を御靈代と云て。鎮祭に給へ  
依由あり。○己命也。子よ次々  
三名よ和とれに。○葛木也。鴨也。神奈備ハ。神名式よ。大和  
国葛上郡よ。高鴨阿治須岐託彦根命神社四座。並名神大  
新也。ある御社は。此座也。何神を祭る。知らぬ。並云  
嘗て思ふよ。高日子根命主神。よて。即此ある大物主事代主  
賀夜奈流美神を。此時の由縁よ。りて。相殿を為給へ依  
ある。同郡よ。鴨山口神社。まよ。鴨都波八重事代主命神社  
ぬぞ有て。迦毛と云は。此邊の大名よ。記傳よ。和名抄よ。  
名あるを。若くハ鳥字。鴨。う。鳥。う。非。ざ。る。云。郷  
れ。お。ま。ど。上。鳥。下。鳥。の。鳥。ハ。誤。字。よ。非。履。中。天。皇。紀。よ。  
上。白。鳥。下。白。鳥。と。ある。地。名。を。二。字。よ。約。と。る。あり。いと。古  
く。此。辺。に。迦。毛。を。云。し。こと。第。百。七。段。の。傳。よ。大。三。輪



神鎮座記を引て、此御社の地を葛木山北東南の麓に高  
季く云るを見よ。此御社の地を葛木山北東南の麓に高  
死所よ在依故ふ。彼事代主神社と分む爲ふ。高鴨と云  
るは、師云此御社今佐味莊神通寺村と云ふあり。高鴨  
と云是古の神戸郷ありと云あり。然出雲風土記に意宇  
郡賀茂神戸所造天下大神命也御子阿遲須積高日子禰  
命坐葛城加茂社此神也神戸故云鴨とあり。出雲ハ此神  
故、彼処は神戸を封、猶古の葛木は高鴨社此事不就  
は甚く混とる説等あり。雄略天皇卷四年二月の處よ。季  
く辨ふ依を見よ。記傳の説を○宇奈堤也神奈備師説  
ふ。和名抄よ。大和国高市郡雲梯宇奈天郷あり。今時も雲  
梯村あり。

葉七、眞鳥住卯名手也神社也云々。十二ふ。不想乎。想常  
云者眞鳥住卯名手乃杜也神思將御知。あど詠る神社の  
御事と聞えと。此卯名手杜を美作、然るよ式ふ。此社に  
載ざはハ。最く不審きおざれぬ。此事を師も疑、故於ら於  
ら思ふ。彼神賀詞を。事代主命能御魂乎。飛鳥乃神奈備  
爾坐賀夜奈流美命能御魂乎。宇奈提爾坐天と有べきが  
紛ひて誤れる物あり。其故を飛鳥神社を式了高市郡飛  
鳥坐神社と出で。事代主命を主と祭れ。加夜奈流美神  
社を式了同郡よ別ふ有て。雲梯村ありと。今因人も云  
ふ。右の如くあるときハ。何れも熟符ひて、二、を言れ於依  
方ともよ少くも疑はし。たことあきなや。



は。寔然る説れまども猶未委のらば其を下ふ云を見は  
し。○賀夜奈流美命名義いほと思得也。備中圀の郡名  
賀夜あり但馬圀  
の郷名よも賀陽あり尾張圀よ成海郷の也然れば地名  
うまよ賀陽ハ萱奈流美を成耳ふて称名うあども思へ  
ど皆也。○飛鳥之神奈備は神名式よ大和圀高市郡ふ飛  
鳥坐神社四座。並名神大月  
次相嘗新嘗とある御社は是也。但し今の  
社地を古と異あり其をま於古の社地を師説よ雄畧天  
皇紀ふ。天皇詔少子部連螺贏曰朕欲見三諸岳神也形。或云  
此山之神為大  
物代主神也云々。此故事ハ靈異記よも委く見えて三  
諸岳ハ云ふち飛鳥之神奈備山と云る處也。三輪山  
をもち  
諸山と云へども此を其方葉三山部赤人登神岳作歌ま  
よあらび混ふはうらび

と十三世長歌あどふ。三諸乃神名備山とも神名備乃三  
諸山とも詠る。皆此飛鳥の神名備也。此山を神岳とも  
雷岳やめ云て。今も即雷土村と云處飛鳥川小傍と依里  
ふて小山あり。飛鳥社をもち其處ふ坐る依れり。然るを  
日本紀畧ふ。天長六年三月己丑大和圀高市郡賀美郷甘  
南備山飛鳥社遷同郡同郷鳥形山依神託宣也とある也。  
今の社地を此鳥形山ありと言れとるふて知はし。然る  
を世  
人これを詳あらざるが如く思ひ岡部翁も疑ハしげり  
言まると今この社地をかの天長よ遷されとる所あり  
事を考へ洩され。ちて此社ハ師も委く辨らざる如く  
事代主神を主神と志て外よ三座を記めて四座あり。上



師の引れとる。雄略天皇紀の或云ふ大物代主神とある。師事代主神の亦名々若くは大物主神事代主神とある。仁中此主神事代主神三字を脱せる。然思ふ由は弘賀屋鳴比女社とある。天太玉と下三社を式飛鳥比賣命神社とある。社等事通ぬる。賀屋鳴比女とある。命神社とある。社等事通ぬる。賀屋鳴比女とある。比女社とある。社等事通ぬる。賀屋鳴比女とある。社ハ事代主神を主神として。餘の三座此一座ハ知れぬ。二座ハ高皇產靈神大物主神と知らる。此座ハ高皇產靈神の御子賀夜奈流美命ハ大物主神の御子あるを飛鳥社と云ふ。以て知べし。宇須多伎比賣と云神ハ何ある神此御子と云ふこと知られざる。今一座を考ふべき由あり。或書ふ飛鳥社ハ事代主命御名方高照姫命下照姫命を祭れりとある。事代主命をさる事あまど餘の三座を信らまじ。又後よ按へむ。播磨国穴栗郡大倭物代主神社と云あり。ちて味鋌高此の大物代主と同神。猶と考ふべし。日子根神事代主神一神あはまや。上ふ委々辨とる如

之れとる。此うかく味鋌高日子根命の御魂は鴨也神奈備事代主命此御魂ハ宇奈提と。別て坐奉巳給へると有は如何と云ふ。味鋌高彦根命を申は。本とめ此御名事代主命を申は。皇美麻命ハ固を避奉巳給へるに依て。負坐る御名あは故。其名々。別て御魂をも二所よ坐奉巳給へは。例に上了敷。此論まよ。此に依て考ふ。依。賀夜奈流美命と申は。決く事代主神の亦名あるべし。然るハ大固主神の御子とち。百八十一神坐は。中とめ撰びて。皇美麻命此近守神と獻巳給へるあまや。優とる功德あは。叶はざる。賀夜奈流美命と云神は。



記紀を更ふ也。出雲風土記亦も其名を見えぬ。師を古事  
主神娶八嶋牟遲能神也。女鳥耳神生子鳥鳴海神と云る  
と同神のよし云れぬまどかの十七世神の段を娶神屋  
楯比賣命生子事代主神也。あるをり外に凡て上代の社  
撰と聞えて信ぐと死事どもあるをや其は師に彼記を  
解れし不どこそ有れ今かく余が古史傳を著せる後  
よく古意を尋ねむ人を彼段を依神名どもの趣を見て  
も自然よ知前事代主神爲神也。御尾前而仕奉則不有  
得むものぞ。違神と大國主神に詔言依を思ふよも。此御名を三出  
されど皆事代主命に御魂を別祀に給へ依よ就て白せ  
依名とあそ覺ゆれ。或人飛鳥社に建御名方神も坐依と  
云説も聞ゆるに付て賀夜奈流美命  
と云ふ彼神の亦名あらむと云依も有れと彼神を近守  
神とよみ獻給ふまじき神あること前段よ見えたる如  
くぬるも然れむ師の飛鳥と宇奈提と神名の入混へる  
此を也

あらむと云まし説もけり説あら神名こそ混おらぬ  
主神ハ同神あれむ妨あし。其を師も引れと依。万葉十三  
小不想乎想常云者眞鳥住卯名手乃杜也神思將御知と  
詠る歌も宇奈提社を事代主神と云て熟符へ也。此哥の  
意を第  
百十七段よ既小委賀夜奈流美命を事代主神あらむ也  
く云るを見るべし。爲ては此歌もさ程小由縁あき歌ぬるをめ熟く思ふは  
し。万葉といふ事案を訛りて詠る哥もをり交  
よし云るよとく合ひて事案神名式小高市郡小加夜奈  
をく詠得とる哥よこそ。流美命神社と依依が謂ゆる宇奈提神社とやうて事  
代主神の亦名あると更小疑あま物ぞ。今現よ雲梯村



を言ふ御坐せ也。或書よ今栢森村と云よ在て葛神と稱  
如く彼村飛鳥よ近くはと云よハ詳ある證あり此を師言の  
神賀詞の本文と合せて推當よ定め依説あるべし採れる  
清和天皇紀よ貞觀元年正月廿七日授大和國從五位下  
賀夜奈流美神正四位下とある是也。はて本書神壽詞  
のみ神奈備てふことの無を岡部翁の補をれは然  
ことあるを師説よ此を落と依ハ非也此社を此高  
鴨まよ飛鳥あどの如き大社よ非ざる故ハ神奈備とハ  
云ざりしれ依べしと言れ故まど神奈備とは凡て神社  
此ことあまむ何れ社より云ざらむ式ハ小社の列あ  
る社よをも神奈備と云ふこと出雲風土記あどよ彼此  
あるを○近守神をば皇京此同心大倭の國內よ坐賜へる  
を云ふ○爲ハ登やいふ辭不當て文と也○貢置ハ多氏  
麻都理於伎と訓法し。古事記よも貢○此と云を也下は  
進と見えたり

姓氏録を採れ也。此事前ハ第百三十一段よ記せる○  
天事代主命この神よ天と稱せること。姓氏録よ也外よ  
は見えび。○飛鳥直よハ姓氏録大和國神別よ飛鳥直天  
事代主命之後也と依よ據て記せ也。但し本録よ此姓  
るを誤あり其を天と云ふと也の過あるべし。まよ伊与  
部天辭代主命之後也を云ふとも有れと彼とハ異あり  
此は第六十段の傳よ辨よるを見へし。まよ垂仁天皇  
皇卷よ大中津日子命飛鳥君祖とあ依よ別氏也。飛鳥  
は上よ出よる如く賀夜奈流美命此社ある所よて其は  
やめて事代主神の亦名よて祭れ依社を依故よ其神の  
御末也。此處よ住て直と成りむ也。然も有べき事也。直  
と云義ハ既よ注牙也。第三十九段のあ直とある耳也



故大國主神平越出八國而還

カレオホクニヌレノカミタヒラゲコレノヤクニラテカヘリ

らび御社小仕奉ルむこ也。言はくも更あ也。今も飛鳥神社よ飛鳥氏の人ありて事代主神の○長柄首。おは姓氏録大和國地末ふ也と傳へたりとぞ。祇部よ長柄首。天乃八重事代主神也後也。とあるを採て記せゆ。長柄を那賀良と訓べし。前よハ孝元天皇卷よ葛城長江とある処あはべく思ひてナカエと神名式尔大和國葛上郡よ長柄神社訓しを惡り也き。の也。天武天皇紀尔幸千朝妻因以看大山位以下之馬於長柄社とある是あ也。今一言主神社の邊よ長柄村あ也此處の首ぬゆ。上総國よも長柄郡と云あり。

マシントキニキマシナガエノヤマニテノリタマハクアガ

坐出時來坐長江山而詔出我

ツクリマシテシラシクニハスメミマノミコトレヅミヨニ

造坐而令國者皇美麻命平世

シラセトヨサシマツレリタビヤクモタツイヅモノクニ

所知依奉出但八雲立出雲國

ハアガレヅマリマスクニメグラレアラカキヤマテタマオキ

者我靜坐國廻青垣山而玉置

テモルトノリタマヒキカレラソコイフモリト

而守也詔矣故號其處云母理



爲將平其越出八国而往出時。シタヒラゲムトソノコレノヤクニラテイデマシトキニ

林地出樹林茂矣爾時詔吾御。ハヤレノトコロノハヤレシゲリキソノトキノリタヒラガ

心出波夜志矣故號其地云拜。コノロノハヤレトキカレラソコイフハヤ

志也。而令因言皇美麻命平世。シト

此段ハ。出雲風土記の傳を採りて成文せること既尔徴  
ふい牙也。○越也八国越とは後尔北陸道七国を建られ

多依諸国を廣く云る稱あれむ。八国ハ古彼国くの中ふ

有し地名り也思牙と和名抄ふも見えぬ。まよ一本よハ

地名も故考ふる。ハは彌了て越の數乃国く也云ふ意を

依ぐ平と有を思ふよも狭き一地れあや。は聞えぬ。ま

一本のハ口よ依らむを孝靈天皇卷よ吉備津日子命針

間を道口と為て吉備国を言向たりと有を思ふよ。弥口

の義よて。弥口よ別をよる越国を平賜へりと云ふ

意と見て違えぬ。○鍊胤按よ口を国の畧字あるべし。○

平は多比良氣と訓せし。又牟氣と訓む。彼越の国くむ。此

時もれ本未造竟給ハバ。惡神も住と依を平賜へ依由あ

也。今皇美麻命不避奉也給ふ国あ依字。其避給ふ際まで。

かく平国クニムケの事よ勞死功しイタみ賜へる神性カムサガの美きこと畏カシ







神の御許よ参<sub>マ</sub>。生子<sub>シ</sub>。此<sub>コ</sub>。次<sub>ジ</sub>。く。を。更<sub>マ</sub>。あり。天地の有<sub>ル</sub>。む。限り。此<sub>コ</sub>。後<sub>ノ</sub>。世<sub>ニ</sub>。守<sub>ル</sub>。ら。む。事<sub>ヲ</sub>。を。ぞ。思<sub>フ</sub>。ふ。ば。う。正<sub>シ</sub>。ら。る。猶<sub>モ</sub>。第<sub>ニ</sub>。百<sub>ニ</sub>。二十三<sub>ニ</sub>。段<sub>ノ</sub>。ま<sub>ニ</sub>。と。第<sub>ニ</sub>。百<sub>ニ</sub>。二十八<sub>ニ</sub>。段<sub>ノ</sub>。の。傳<sub>ハ</sub>。よ<sub>モ</sub>。委<sub>ク</sub>。註<sub>ス</sub>。ふ。を。見<sub>ル</sub>。む。し。○還<sub>カ</sub>。坐<sub>シ</sub>。とは。出<sub>ル</sub>。雲<sub>ノ</sub>。固<sub>ニ</sub>。へ。あり。○

長<sub>カ</sub>。江<sub>ノ</sub>。山<sub>ノ</sub>。を。意<sub>フ</sub>。宇<sub>ノ</sub>。郡<sub>ノ</sub>。の。處<sub>ニ</sub>。ふ。長<sub>カ</sub>。江<sub>ノ</sub>。山<sub>ノ</sub>。郡<sub>ノ</sub>。家<sub>ノ</sub>。東<sub>ノ</sub>。南<sub>ノ</sub>。五<sub>ノ</sub>。十<sub>ノ</sub>。里<sub>ノ</sub>。精<sub>有</sub>。水<sub>也</sub>。○

見<sub>ル</sub>。也。今<sub>レ</sub>。能<sub>ク</sub>。義<sub>ヲ</sub>。郡<sub>ノ</sub>。不<sub>レ</sub>。屬<sub>ス</sub>。て。母<sub>ノ</sub>。里<sub>ノ</sub>。鄉<sub>ノ</sub>。井<sub>ノ</sub>。尻<sub>ノ</sub>。村<sub>ノ</sub>。の。中<sub>ノ</sub>。上<sub>ノ</sub>。○今<sub>レ</sub>。固<sub>ニ</sub>。を。

志<sub>シ</sub>。良<sub>シ</sub>。斯<sub>レ</sub>。志<sub>シ</sub>。久<sub>ク</sub>。邇<sub>ク</sub>。を。訓<sub>シ</sub>。法<sub>シ</sub>。し。今<sub>レ</sub>。字<sub>一</sub>。本<sub>一</sub>。ふ。命<sub>ト</sub>。か。け。け。て。此<sub>レ</sub>。は。

今<sub>レ</sub>。避<sub>ケ</sub>。給<sub>フ</sub>。不<sub>レ</sub>。現<sub>レ</sub>。固<sub>ニ</sub>。を。詔<sub>シ</sub>。牙<sub>シ</sub>。正<sub>シ</sub>。は。訂<sub>ス</sub>。正<sub>ス</sub>。本<sub>ヲ</sub>。ふ。志<sub>シ</sub>。豆<sub>ツ</sub>。美<sub>ミ</sub>。與<sub>ヨ</sub>。と。訓<sub>シ</sub>。る。不<sub>レ</sub>。從<sub>フ</sub>。法<sub>シ</sub>。し。靜<sub>シ</sub>。御<sub>ノ</sub>。世<sub>ノ</sub>。の。義<sub>ヲ</sub>。お

正<sub>シ</sub>。今<sub>レ</sub>。避<sub>ケ</sub>。給<sub>フ</sub>。時<sub>ヲ</sub>。お。る。故<sub>ニ</sub>。ふ。祝<sub>ヒ</sub>。白<sub>シ</sub>。給<sub>フ</sub>。へ。法<sub>シ</sub>。お。正<sub>シ</sub>。○依<sub>リ</sub>。奉<sub>ル</sub>。也<sub>ニ</sub>。也。

前<sub>サ</sub>。不<sub>レ</sub>。此<sub>レ</sub>。葦<sub>ノ</sub>。原<sub>ノ</sub>。中<sub>ノ</sub>。固<sub>ノ</sub>。者<sub>ノ</sub>。隨<sub>テ</sub>。命<sub>ヲ</sub>。既<sub>ニ</sub>。獻<sub>ス</sub>。焉<sub>ニ</sub>。と。詔<sub>シ</sub>。牙<sub>シ</sub>。る。よ。當<sub>レ</sub>。れ。ぬ。○但<sub>シ</sub>

八<sub>ヤ</sub>。雲<sub>クモ</sub>。立<sub>タツ</sub>。出<sub>ル</sub>。雲<sub>ノ</sub>。固<sub>ノ</sub>。者<sub>ノ</sub>。我<sub>ガ</sub>。靜<sub>シ</sub>。坐<sub>シ</sub>。固<sub>ニ</sub>。と。を。大<sub>ニ</sub>。八<sub>ノ</sub>。嶋<sub>ノ</sub>。固<sub>ノ</sub>。を。盡<sub>ク</sub>。天<sub>ノ</sub>。神<sub>ノ</sub>。御<sub>ノ</sub>

子<sub>ヲ</sub>。不<sub>レ</sub>。讓<sub>リ</sub>。避<sub>ケ</sub>。正<sub>シ</sub>。給<sub>フ</sub>。中<sub>ニ</sub>。よ。但<sub>シ</sub>。出<sub>ル</sub>。雲<sub>ノ</sub>。固<sub>ノ</sub>。の。み。を。我<sub>ガ</sub>。の。靜<sub>シ</sub>。坐<sub>シ</sub>。む。固<sub>ニ</sub>。を

詔<sub>シ</sub>。牙<sub>シ</sub>。る。ぬ。り。前<sub>ノ</sub>。不<sub>レ</sub>。此<sub>レ</sub>。大<sub>ニ</sub>。神<sub>ノ</sub>。此<sub>レ</sub>。言<sub>フ</sub>。も。天<sub>ノ</sub>。神<sub>ノ</sub>。の。御<sub>ノ</sub>。勅<sub>ヲ</sub>。よ。も。其<sub>レ</sub>

今<sub>レ</sub>。か。く。詔<sub>シ</sub>。牙<sub>シ</sub>。る。本<sub>ヲ</sub>。を。り。所<sub>ニ</sub>。由<sub>リ</sub>。ある。出<sub>ル</sub>。雲<sub>ノ</sub>。固<sub>ノ</sub>。を。見<sub>ル</sub>。え。ざる。を。

次<sub>ニ</sub>。段<sub>ノ</sub>。よ。天<sub>ノ</sub>。神<sub>ノ</sub>。の。御<sub>ノ</sub>。量<sub>ヲ</sub>。以<sub>テ</sub>。出<sub>ル</sub>。雲<sub>ノ</sub>。固<sub>ノ</sub>。を。○廻<sub>ル</sub>。青<sub>ノ</sub>。垣<sub>ノ</sub>。山<sub>ノ</sub>。を。ふ。言<sub>フ</sub>。此<sub>レ</sub>

義<sub>ヲ</sub>。を。既<sub>ニ</sub>。註<sub>ス</sub>。牙<sub>シ</sub>。正<sub>シ</sub>。の。傳<sub>ハ</sub>。見<sub>ル</sub>。法<sub>シ</sub>。し。○王<sub>ヲ</sub>。置<sub>キ</sub>。而<sub>シ</sub>。也。本<sub>ノ</sub>。よ。玉<sub>ノ</sub>。珍<sub>ノ</sub>。置<sub>キ</sub>。賜<sub>フ</sub>

賜<sub>フ</sub>。字<sub>ハ</sub>。無<sub>ク</sub>。て。も。有<sub>ル</sub>。真<sub>ノ</sub>。龍<sub>ノ</sub>。云<sub>フ</sub>。此<sub>レ</sub>。を。書<sub>キ</sub>。紀<sub>ス</sub>。一<sub>ノ</sub>。書<sub>ノ</sub>。不<sub>レ</sub>。躬<sub>ヲ</sub>。披<sub>キ</sub>。瑞<sub>ノ</sub>。也<sub>ニ</sub>。八<sub>ノ</sub>。坂<sub>ノ</sub>

瓊<sub>ヲ</sub>。而<sub>シ</sub>。長<sub>ク</sub>。隱<sub>レ</sub>。矣<sub>ニ</sub>。と。何<sub>レ</sub>。も。不<sub>レ</sub>。同<sub>ク</sub>。固<sub>ニ</sub>。知<sub>ル</sub>。看<sub>ル</sub>。君<sub>ノ</sub>。此<sub>レ</sub>。纏<sub>ル</sub>。給<sub>フ</sub>。を。是<sub>レ</sub>。時<sub>ニ</sub>

固<sub>ニ</sub>。讓<sub>リ</sub>。の。を。る。し。よ。置<sub>キ</sub>。給<sub>フ</sub>。不<sub>レ</sub>。也<sub>ニ</sub>。書<sub>キ</sub>。紀<sub>ス</sub>。本<sub>ノ</sub>。文<sub>ノ</sub>。よ。以<sub>テ</sub>。平<sub>ノ</sub>。固<sub>ノ</sub>。時<sub>ノ</sub>。所<sub>ノ</sub>。杖<sub>ノ</sub>

也<sub>ニ</sub>。廣<sub>ク</sub>。不<sub>レ</sub>。授<sub>ケ</sub>。二<sub>ノ</sub>。神<sub>ノ</sub>。と。何<sub>レ</sub>。も。同<sub>ク</sub>。固<sub>ニ</sub>。讓<sub>リ</sub>。正<sub>シ</sub>。の。を。法<sub>シ</sub>。し。物<sub>ヲ</sub>。あり。と

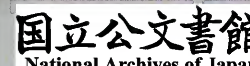
云<sub>フ</sub>。る。を。然<sub>ル</sub>。說<sub>フ</sub>。不<sub>レ</sub>。也<sub>ニ</sub>。從<sub>フ</sub>。法<sub>シ</sub>。し。前<sub>ノ</sub>。よ。ハ。玉<sub>ノ</sub>。置<sub>キ</sub>。と。を。御<sub>ノ</sub>。靈<sub>ヲ</sub>。を。止<sub>メ</sub>。置<sub>キ</sub>

給<sub>フ</sub>。由<sub>リ</sub>。お。ら。む。と。思<sub>フ</sub>。へ。り。し。ハ



悪<sup>ウ</sup>ク<sup>ル</sup> ○守<sup>モル</sup>と<sup>カ</sup>。前<sup>マ</sup>ふ<sup>カ</sup>於<sup>ニ</sup>八十<sup>ヤ</sup>垆<sup>ツ</sup>手<sup>デ</sup>隱<sup>カ</sup>り<sup>テ</sup>侍<sup>サマ</sup>焉<sup>ム</sup>。と<sup>ラ</sup>白<sup>シ</sup>賜<sup>ル</sup>へ<sup>ル</sup>り<sup>キ</sup>。 ○侍<sup>サマ</sup>よ<sup>シ</sup>同<sup>シ</sup>。 お布<sup>フ</sup>彼<sup>カ</sup>処<sup>コ</sup>の傳<sup>ワ</sup>は ○母<sup>モ</sup>理<sup>リ</sup>と<sup>カ</sup>。意<sup>イ</sup>宇<sup>ウ</sup>郡<sup>クニ</sup>よ<sup>テ</sup>。本<sup>ホ</sup>ふ<sup>カ</sup>母<sup>モ</sup>理<sup>リ</sup>郷<sup>サト</sup>郡<sup>クニ</sup>家<sup>ケ</sup>、東<sup>トウ</sup>南<sup>ナン</sup>卅<sup>サツ</sup>九<sup>ク</sup>里<sup>リ</sup>一<sup>ヒト</sup>百<sup>ヒャク</sup>九<sup>ク</sup>十<sup>ジュウ</sup>步<sup>フ</sup>。云<sup>ク</sup>々<sup>々</sup>を<sup>カ</sup>何<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>。 此<sup>コノ</sup>云<sup>ク</sup>々<sup>々</sup>と<sup>カ</sup>約<sup>ヤク</sup>と<sup>ル</sup>と上<sup>ウ</sup>件<sup>ケン</sup>の<sup>コノ</sup>此<sup>コノ</sup>採<sup>サイ</sup>和<sup>ワ</sup>名<sup>ナ</sup>抄<sup>セウ</sup>ふ<sup>カ</sup>。能<sup>ノ</sup>義<sup>ギ</sup>郡<sup>クニ</sup>ふ<sup>カ</sup>。此<sup>コノ</sup>郷<sup>サト</sup>名<sup>ナ</sup>出<sup>デ</sup>と<sup>ル</sup>は<sup>カ</sup>。彼<sup>カノ</sup>郡<sup>クニ</sup>は<sup>カ</sup>。後<sup>ノチ</sup>ふ<sup>カ</sup>意<sup>イ</sup>宇<sup>ウ</sup>郡<sup>クニ</sup>字<sup>ジ</sup>割<sup>カ</sup>て<sup>テ</sup>建<sup>タテ</sup>と<sup>ル</sup>れ<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>也<sup>ナリ</sup>。 風<sup>フウ</sup>土<sup>ツ</sup>記<sup>キ</sup>抄<sup>セウ</sup>ふ<sup>カ</sup>。母<sup>モ</sup>理<sup>リ</sup>と<sup>カ</sup>。草<sup>クサ</sup>野<sup>ノ</sup>十<sup>ジュウ</sup>年<sup>ネン</sup>畑<sup>ヘ</sup>月<sup>ツキ</sup>波<sup>ハ</sup>赤<sup>セキ</sup>屋<sup>ヤ</sup>大<sup>ダイ</sup>日<sup>ニチ</sup>良<sup>リヤウ</sup>横<sup>コウ</sup>屋<sup>ヤ</sup>峠<sup>トウ</sup>内<sup>ノウ</sup>三<sup>サン</sup>坂<sup>ハカ</sup>市<sup>シ</sup>高<sup>カウ</sup>江<sup>カウ</sup>井<sup>イ</sup>尻<sup>シ</sup>福<sup>フク</sup>吉<sup>キチ</sup>小<sup>コ</sup>竹<sup>チク</sup>市<sup>シ</sup>比<sup>ヒ</sup>安<sup>アン</sup>田<sup>テン</sup>等<sup>トウ</sup>の<sup>ノ</sup>地<sup>チ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>ク</sup>云<sup>フ</sup>り。大<sup>ダイ</sup>社<sup>シャ</sup>記<sup>キ</sup>ふ<sup>カ</sup>。大<sup>ダイ</sup>社<sup>シャ</sup>の<sup>ノ</sup>左<sup>サ</sup>ふ<sup>カ</sup>。母<sup>モ</sup>里<sup>リ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>フ</sup>所<sup>コロ</sup>あ<sup>リ</sup>也<sup>ナリ</sup>。是<sup>コノ</sup>御<sup>ミ</sup>神<sup>カミ</sup>の<sup>ノ</sup>御<sup>ミ</sup>旅<sup>リ</sup>所<sup>コロ</sup>と<sup>イ</sup>ふ<sup>カ</sup>。此<sup>コノ</sup>地<sup>チ</sup>名<sup>ナ</sup>を<sup>カ</sup>杵<sup>キ</sup>築<sup>キ</sup>へ<sup>テ</sup>移<sup>ウツ</sup>せ<sup>ル</sup>る<sup>カ</sup>也<sup>ナリ</sup>。 ○林<sup>ハヤシ</sup>地<sup>チ</sup>と<sup>カ</sup>ハ。意<sup>イ</sup>宇<sup>ウ</sup>郡<sup>クニ</sup>拜<sup>イハ</sup>志<sup>シ</sup>郷<sup>サト</sup>の<sup>ノ</sup>地<sup>チ</sup>を<sup>カ</sup>云<sup>フ</sup>。机<sup>キ</sup>不<sup>フ</sup>下<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>見<sup>ミ</sup>え<sup>ト</sup>也<sup>ナリ</sup>。 ○御<sup>ミ</sup>心<sup>ココロ</sup>也<sup>ナリ</sup>。波<sup>ハ</sup>夜<sup>ヤ</sup>志<sup>シ</sup>と<sup>カ</sup>は。顯<sup>ケン</sup>宗<sup>ソウ</sup>天<sup>テン</sup>皇<sup>カウ</sup>此<sup>コノ</sup>室<sup>ムロ</sup>壽<sup>ス</sup>の<sup>ノ</sup>御<sup>ミ</sup>詞<sup>コトバ</sup>も<sup>カ</sup>。取<sup>トリ</sup>舉<sup>ト</sup>棟<sup>トウ</sup>梁<sup>リヤウ</sup>者<sup>ハ</sup>。此<sup>コノ</sup>家<sup>ケ</sup>君<sup>キミ</sup>御<sup>ミ</sup>心<sup>ココロ</sup>也<sup>ナリ</sup>。林<sup>ハヤシ</sup>也<sup>ナリ</sup>。と<sup>カ</sup>見<sup>ミ</sup>

え。万<sup>マン</sup>葉<sup>ハツ</sup>十<sup>ジュウ</sup>六<sup>ロク</sup>ふ<sup>カ</sup>。鹿<sup>カ</sup>よ<sup>シ</sup>代<sup>ダイ</sup>り<sup>テ</sup>詠<sup>エイ</sup>る<sup>カ</sup>哥<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>。吾<sup>ガ</sup>角<sup>カク</sup>者<sup>ハ</sup>御<sup>ミ</sup>笠<sup>カサ</sup>乃<sup>ナリ</sup>波<sup>ハ</sup>夜<sup>ヤ</sup>詩<sup>シ</sup>云<sup>フ</sup>。吾<sup>ガ</sup>毛<sup>モウ</sup>等<sup>トウ</sup>者<sup>ハ</sup>御<sup>ミ</sup>筆<sup>ヒツ</sup>波<sup>ハ</sup>夜<sup>ヤ</sup>斯<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>カ</sup>何<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>。 はと諸<sup>シヨ</sup>祝<sup>シユ</sup>詞<sup>ジ</sup>ふ<sup>カ</sup>。伊<sup>イ</sup>加<sup>カ</sup>志<sup>シ</sup>夜<sup>ヤ</sup>久<sup>ク</sup>波<sup>ハ</sup>戲<sup>キ</sup>能<sup>ノ</sup>如<sup>ニ</sup>久<sup>ク</sup>仕<sup>シ</sup>奉<sup>ホウ</sup>利<sup>リ</sup>佐<sup>サ</sup>加<sup>カ</sup>戲<sup>キ</sup>志<sup>シ</sup>米<sup>メ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>フ</sup>こ<sup>ノ</sup>を<sup>カ</sup>何<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>。此<sup>コノ</sup>を<sup>カ</sup>岡<sup>オウ</sup>部<sup>ブ</sup>翁<sup>ウ</sup>説<sup>セツ</sup>ふ<sup>カ</sup>。夜<sup>ヤ</sup>久<sup>ク</sup>波<sup>ハ</sup>戲<sup>キ</sup>ハ。彌<sup>イ</sup>木<sup>コ</sup>榮<sup>エ</sup>あ<sup>リ</sup>也<sup>ナリ</sup>。彌<sup>イ</sup>木<sup>コ</sup>が<sup>カ</sup>上<sup>ウ</sup>ふ<sup>カ</sup>木<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>生<sup>ナ</sup>榮<sup>エ</sup>も<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>林<sup>ハヤシ</sup>と<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>波<sup>ハ</sup>戲<sup>キ</sup>と<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>云<sup>フ</sup>。遠<sup>エン</sup>江<sup>カウ</sup>人<sup>ニ</sup>と<sup>カ</sup>。木<sup>キ</sup>草<sup>クサ</sup>此<sup>コノ</sup>孫<sup>ソノ</sup>枝<sup>エ</sup>此<sup>コノ</sup>生<sup>ナ</sup>茂<sup>モウ</sup>る<sup>カ</sup>也<sup>ナリ</sup>。夜<sup>ヤ</sup>暮<sup>コ</sup>婆<sup>ハ</sup>戲<sup>キ</sup>也<sup>ナリ</sup>。云<sup>フ</sup>ぬ<sup>カ</sup>即<sup>ソレ</sup>是<sup>コノ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>カ</sup>何<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>。此<sup>コノ</sup>の<sup>ノ</sup>波<sup>ハ</sup>夜<sup>ヤ</sup>志<sup>シ</sup>も<sup>カ</sup>。林<sup>ハヤシ</sup>樹<sup>ジュ</sup>此<sup>コノ</sup>生<sup>ナ</sup>榮<sup>エ</sup>も<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>見<sup>ミ</sup>行<sup>ユク</sup>し<sup>テ</sup>。吾<sup>ガ</sup>心<sup>ココロ</sup>の<sup>ノ</sup>如<sup>ニ</sup>と<sup>カ</sup>榮<sup>エ</sup>ふ<sup>カ</sup>依<sup>イ</sup>と<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>詔<sup>ミコトノコト</sup>へ<sup>テ</sup>依<sup>イ</sup>あ<sup>リ</sup>也<sup>ナリ</sup>。 御<sup>ミ</sup>心<sup>ココロ</sup>也<sup>ナリ</sup>と<sup>カ</sup>何<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>。下<sup>シタ</sup>ふ<sup>カ</sup>。如<sup>ニ</sup>と<sup>カ</sup>。其<sup>ソノ</sup>を<sup>カ</sup>因<sup>イン</sup>作<sup>サツ</sup>此<sup>コノ</sup>功<sup>コウ</sup>成<sup>セイ</sup>竟<sup>ケイ</sup>て<sup>テ</sup>。理<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>如<sup>ニ</sup>く<sup>カ</sup>現<sup>ゲン</sup>因<sup>イン</sup>と<sup>カ</sup>。天<sup>テン</sup>神<sup>カミ</sup>御<sup>ミ</sup>子<sup>コ</sup>立<sup>タテ</sup>奉<sup>ホウ</sup>也<sup>ナリ</sup>。已<sup>イ</sup>命<sup>メイ</sup>は<sup>カ</sup>隱<sup>カク</sup>り<sup>テ</sup>。幽<sup>ウ</sup>事<sup>ジ</sup>を<sup>カ</sup>知<sup>チ</sup>看<sup>ケン</sup>ら<sup>ズ</sup>き<sup>カ</sup>御<sup>ミ</sup>勅<sup>トク</sup>を<sup>カ</sup>侍<sup>サマ</sup>す<sup>カ</sup>。蒙<sup>モウ</sup>也<sup>ナリ</sup>坐<sup>マ</sup>る<sup>カ</sup>事<sup>ジ</sup>を<sup>カ</sup>歡<sup>カン</sup>喜<sup>キ</sup>し<sup>テ</sup>。御<sup>ミ</sup>心<sup>ココロ</sup>此<sup>コノ</sup>咲<sup>エミ</sup>榮<sup>エ</sup>坐<sup>マ</sup>せ<sup>レ</sup>む<sup>カ</sup>也<sup>ナリ</sup>。 ま<sup>マ</sup>と<sup>カ</sup>是<sup>コノ</sup>依<sup>イ</sup>て<sup>テ</sup>思<sup>シ</sup>ふ<sup>カ</sup>。已<sup>イ</sup>命<sup>メイ</sup>ハ<sup>カ</sup>終<sup>シュウ</sup>す<sup>カ</sup>。









カミノミヤノミヨソノミタテツクリキカレニ  
神出宮出御装出楯造出仍至

イマツクリタテホコラテタテマツルスメガミタチニスナチタテ  
今造楯梓而立奉皇神等爾楯

ヌヒノトコロコレナリ  
縫出地是也

於是産巢日神也云々此宮造の古也書紀尔は高皇産靈  
神の勅と何也出雲風土記ふも神魂命此天御量と何也  
故二柱をり祓て産巢日神也とは記せ也其たりの高皇  
も神皇産靈神御子とも二方も傳とるをば多産巢日  
神御子と記せる例あり殊り皇美麻命御天降の事ハ古

事記書紀よこそ高皇産靈神の御名此み出とれ神賀詞  
ふも高御魂神魂命能皇御孫命尔天下大八島国乎事依  
奉之時と何り然れど神皇産靈神  
も預り給ふること著明きな也  
○天御量の古也ハ既  
ふ出とり第五十段の如大因主神也請白而此請白  
し給子依宮造此状也上小見えぬ也但し此私補と  
る文ある由は既  
徴よ委く多藝志也小濱也師云舟具も多藝斯と云物  
云へりき○多藝志也小濱也師云舟具も多藝斯と云物  
何也其小依れる名尔也その當藝斯のことハ景行  
天皇卷倭建命段よ見也  
此也杵築大社の地此古名と聞えぬ依也此名他不見と  
依也や外し風土記ふも出雲郡出雲御崎山云々西下所  
謂所造天下大神也社坐也云と切られと依文也郡家正  
北北七里三百六十歩高三百  
六十丈周九十六里と何り  
也は有まども多藝志也小



濱てふこをは凡て見えぬ。内山眞龍云武志村と云  
村今も神門郡とあり。○御舎ハ美阿良訶と訓む。名義を  
塩冶郷内あり。在所あり。季くは既ふ註へり。第五十段御殿ちて今此造  
奉る御舎ハ大圀主神の永久に隠す鎮坐す御社ふて。即  
杵築大社あり。上第百十六段よ云るを見べし。御子とは  
産巢日神の御子也由れ。○天御鳥命一本よ天御鳥は  
は名義をいまだ考得ぬと決て彦狭知命あるべし。其  
を産巢日神に御子也云ひ。楯を造ると有ふて知らぬ。此  
ハ産巢日神の御子よて楯を造り始ちる文の趣よては  
とること。第五十段を見多知を。楯むの正を此神を天降して造し給へると聞ゆれど

手置帆負命をも天降して御舎をも。此二神も造し給  
ひらむ。其上よ。天照大御神の瑞御殿まよ御笠盾を  
も。此二神して造り。下ふ大物主神に御装物を造る處よ  
め。手置帆負神定爲笠作者彦狭知神爲楯縫者と有れむ  
れ。内山眞龍が解よ。天御鳥命ハ天夷鳥命亦名天鳥船  
命と同神ふて。船の美乎よ依れる名あるを。と云  
るを非あり。風土記よ。神魂。○楯部ハ例ふ依て云は。部  
命の御子とあり。物なや。とは。其部れおやあれども。此を然らば。上引る文よ。楯  
縫者やあるふ同じかるべし。○退は。麻加理と訓べし。貴  
所よ退去を云。委くは第三十段○大神也。大圀主神  
を申せり。○御装ハ美與曾比と訓べし。一本よ装束ちて



御装小楯を用ふる事ハ既ふ云第百十六段白楯○至の処見るべし

今云くは。出雲風土記を奏進奏進れる。天平五年を云。然れど

當時ソノトキまで。猶ナホ神世のほハふ。其事を繼ツギて仕奉れるあハ也。其

此、固ツくも、彦狭知命亦名、天御鳥命の裔ウラ此ありて。さて此

小楯タテ梓ホコとあまむ。上ウヘに決キ絶ツて梓を造れる傳も有アりむカ。

脱モとるぬル。其は梓も、社ヤに装カふ用。○皇神等スメガミタチハ。前マに等ト、字

依ヨしテ、惡アク神賀詞カミカヒノコトふ。加夫呂伎熊野大神カフロキクニノオホカミ、御氣野命ミケノノミコト、固作ツクリ、

坐志大穴持命サシオホアナノミコト、二柱神乎始ニハしらカミ、天百八十六社坐皇神等乎アメヤハヒロニミヌスメガミタチヲ云

云。志都宮爾靜米仕奉氏シツミヤニルシヅメシノウヂとある出雲、固造ツクリが祭る。百八十

六社の神等を申せ凡て固くの諸神社を、其固造の也。預りて拜祭る古例あまむバハぬル。ち

て須米スメてふ言は。上ウヘに云ハる如く統スの義ミチふて。其レ天照大

御神ミカミに美麻命ミマノミコトを稱ナへて。須米美麻命スメミマノミコトと詔ミコトへルとハり起ハり

ふ。其言コトふ皇字スメ我當アテとハらズ。無上至尊カミナキタフトビ此稱言タハヘコトとあハりて。御

祖神ミコトとちハなモ。皇御祖皇神スメミオヤスメガミあハり申ス。其レとハり轉ウツして他神アガレカミ

等タチ我ハさハりハ。弘ヒロく申ス言ハとハハりハ也。故祝詞式コトワザノカタチをはじめ。

古書等コトシロノミ小。他神等をミカミをミかク白シせリ。○楯縫タテヌヒ中ナカ地チハ。出雲、固

楯縫タテヌヒ郡ノあハり。楯縫郷タテヌヒノコウをミめリて和名抄ニギハヤヒも見ミえスとハり。風土

并ナ多タ久ク谷ヤ岡カ田タ布フ崎サキ古コ井イ津ツ三ミ津ツ只シ浦ウラ塩シホ津ツ等ト為ナ一ヒト郷コウとハり。はハり意イ宇ウ郡ノふハり楯縫郷タテヌヒノコウあ

也。此所ココを楯縫タテヌヒと云ハり。此所ココを楯縫タテヌヒと云ハり。此所ココを楯縫タテヌヒと云ハり。此所ココを楯縫タテヌヒと云ハり。

六段ムツノ見ミゆル也。○古史傳コシデン二十三ニ。○四十シ



於是大國主神以其平國出時

所杖出廣予授二柱神而白出

吾以此予卒有治功皇美麻命

用此予治國則必當平安吾所

治顯明事者皇美麻命當治吾

退而將治幽冥事白而乃薦岐

神於二柱神而此神代吾而當

奉從言訖而即躬披瑞出八坂

瓊而遂於八百丹杵築宮長隱

鎮坐矣此宮造出時諸神等參



ツドロミヤコニテキヅキタマレユニイフキヅキトマタ  
集宮處而杵築出故云杵築亦  
ニサガノカハウチモヤソガミタチソレヒマレ  
於佐香河内百八十神等集坐  
タテタマヒニクリヤテレメカマサケラタマヒテモヤ  
立給御厨而令釀酒給出百八  
ソカアソビテアラケマレキカレイフサ  
十日喜燕而解散坐矣故云佐  
ガト  
香也。

平因之時<sup>ク</sup>玖邇牟祁多麻比志登伎<sup>ニムケタマヒシトキ</sup>と訓<sup>ヨム</sup>はし。平を牟祁  
あり。舊く多比良宜<sup>タヒラキ</sup>彼惡神邪鬼を撥平巡<sup>ハシラケメ</sup>に給<sup>タマハ</sup>りし時を  
と訓とまどわろし。○所杖<sup>ツク</sup>中<sup>ナカ</sup>ハ都伎多麻閉流<sup>ツキタマヒル</sup>と訓<sup>ヨム</sup>べし。舊くハ都祁<sup>ツキ</sup>  
云ふ。○所杖<sup>ツク</sup>中<sup>ナカ</sup>ハ都伎多麻閉流<sup>ツキタマヒル</sup>と訓<sup>ヨム</sup>べし。理志<sup>リシ</sup>と訓<sup>ヨム</sup>り。○  
廣<sup>ヒロ</sup>示<sup>ホコ</sup>大<sup>オホ</sup>御<sup>ミ</sup>示<sup>ホコ</sup>は其和魂大物主神の海を光<sup>ヒラ</sup>して現<sup>アハ</sup>れ依<sup>ヨ</sup>  
給<sup>タマハ</sup>へる時<sup>トキ</sup>。持<sup>モチ</sup>來<sup>キ</sup>給<sup>タマハ</sup>へる天<sup>アマ</sup>薙<sup>ヌ</sup>示<sup>ホコ</sup>亦<sup>モト</sup>依<sup>ヨ</sup>べきまを既<sup>スデ</sup>ふ云<sup>イハ</sup>る  
の如<sup>ごと</sup>し。第九十六段の傳見<sup>ツクシ</sup>べし。○二柱神<sup>ニツクシ</sup>とは經津主<sup>フツヌシ</sup>建御雷<sup>タケミカヅチ</sup>二神<sup>ニカミ</sup>を  
いふ。○授<sup>ツク</sup>む舊<sup>フル</sup>く佐豆祁<sup>サヅケ</sup>を訓<sup>ヨム</sup>るは從<sup>ツク</sup>ふ也<sup>ナリ</sup>。凡<sup>ソレ</sup>て佐豆祁<sup>サヅケ</sup>  
は眞<sup>マコト</sup>に通<sup>ツク</sup>ひて眞<sup>マコト</sup>付<sup>ツケ</sup>の義<sup>カミ</sup>と通<sup>ツク</sup>えたり。○有<sup>アル</sup>治功<sup>チカミ</sup>ハ義<sup>カミ</sup>を得<sup>ユク</sup>て伊<sup>イ</sup>佐<sup>サ</sup>袁<sup>ヲ</sup>志<sup>シ</sup>乎<sup>ナ</sup>那<sup>ナ</sup>  
勢<sup>セ</sup>理<sup>リ</sup>を訓<sup>ヨム</sup>はし。○當<sup>ナラ</sup>平安<sup>サケレ</sup>平安<sup>サケレ</sup>を麻佐祁<sup>マサケ</sup>久<sup>ク</sup>と訓<sup>ヨム</sup>由<sup>ヨリ</sup>は既<sup>スデ</sup>ふ  
云<sup>イハ</sup>す。第六十三段の傳見<sup>ツクシ</sup>也<sup>ナリ</sup>。ちて二柱神<sup>ニツクシ</sup>亦<sup>モト</sup>授<sup>ツク</sup>とは有<sup>アル</sup>れ也<sup>ナリ</sup>。實<sup>マコト</sup>ハ皇美<sup>ミコト</sup>



麻命タラマツリ奉進給へるれはと。此御言ミコト了て著し。抑今オホ罔字  
避給ふ際サカ。此御言ミコトを奉りて。かく白給ハク牙依義ヨシハ此言コト残  
杖ツキて。罔平ミナ給へは故コト了。亦名ナを八千言ヤチ神とも負坐ツキし。勇猛イサミ  
き御稜威ミツを振スひて。功成コト給へまば。皇美麻命ミツめ。是とコト了後  
天下を治賜チハむ。此コトを惡神アクカミの恐畏オチカレ終る言コトふし有れを。  
我ワが如ごとく此コトを取持トリモテして。武タケき御稜威ミツをもて治賜チは。平  
安坐ケクおむ物ぞと御言ミコトを遺ノコし給タテ牙依ヨシおマす。其コト此コト時トキまで  
治チ先給へる。左も右も武タケ道ミチあらで。邪ヨ鬼キも怖おそれ安退  
り。天アメ皇祖神ミコとちの伊邪イセ那ナ岐キ伊邪イセ那ナ美ミ命ミコト。天アメ瓊ニギ言コトを依  
し賜へる。よ原ハラおる。神カミ此道コトふそ有アルハ依ヨシ纂スミ疏スふ。以此ココ言コト、  
卒有治功ソド一句イツク王法オウホフ成立テイリツ之本ノホ也ナリ。言コトひ。或シ説セツふ。故外罔コト  
是授治罔之要道也コトと云るも。共トモ了然コトる説セツれ。故外罔コト

此説コトの入來イリキざマす。古コ此コト天皇命ミコトノミコトとちの。此道コトよ依坐ヨシおマす。  
勇猛イサミき大御稜威オホミツを振スひ坐マて。天下ツク此コト不服フボク人ヒトども茂シぬ。平  
治チ先給タテ了る。あや申マカひも更シおは中ナカふ。景行天皇キョウコウテンノウ此御世コトノミヨふ。  
倭建命ヤマトタケル小東罔コトを平チし。先給タテふ時トキ。柘木ヒノキハ尋言ヒロコトを賜へる。  
神功皇后シムケノミコトノミコトの韓罔カンクを征給チ多時タトシ。御言ミコトを杖給ツキへり。と有アルれ  
と正ただ了此コト。乃由緒コトふ依給へる事コトあマす。其コト其コト段トキくコト了  
はて此授給へる廣言ヒロコト。何處ナニよ納ウケまり。と云イハこを。は。下シふ  
云を見ミ。第百三十三段ヒャクサンジヤウ。○顯明事ケンメイコトハ阿良波アラハ碁登カキノリと訓コトは  
し。書紀シヤキハ顯露事ケンロコトと書カキて顯露ケンロ此コト云イハ。阿羅幡アラハタ貳ニを有アルる貳  
常トコよも阿良波アラハとこそ云イハ了。辞コトあらで。阿良波迹アラハノシと云イハ言コトは  
う。於コトて有アルこを無ナシれ。むあり。然シカるを祝詞考イハヒコトよ。貳ニを利トクよ通



ひてアラハリ此事ありと云れしを信のとし。儲まと顯露と書れとる露字此ハいと物遠なれば下よ引く纂疏よ據て顯明と書於之を古き熟字カミ上ノ現事とあるノ了て阿良波を云う熟當れバあり。此大神の治看せざる事なまむ吾所治同じ。おは是時まで。○皇美麻命當治とは。前よ高皇彥靈神とは詔牙依外也。○皇美麻命治し。汝を神此御言ふ。汝が治せる現事ハ。皇美麻命治し。汝を神事を治せ。と詔へ依命のはふく。幽事をバ吾治む。美麻命を顯事を治せ。や讓申し給ふ外也。○退而ハ。佐加理氏を訓む。し。そを避とも有れ。あり。佐理ハ。佐加理の省語あり。また加久理氏とも訓べし。また麻加理と訓むも。惡彼謂ゆる八十垵手。不隱れむ。と詔ふ。了て。案よ。産巢日神の天御量以て造し。終給へ依宮。不鎮坐。此を云。

○幽冥事ハ。加久理基登と訓はし。書紀ハ。幽事と云れ。事を三字よ書れ。とま。本を決めて。此も三字よ書れ。けむ。お。一字落ると見ゆ。れ。下よ引く。纂疏。不撰て。幽冥と書於。こハ古き熟字よ。て。加久理と云。不允當れ。む。あり。舊事紀。不幽神事とあり。本を然有。む。も。知べ。う。ら。ば。儲ま。と。書。紀。よ。幽。事。を。カ。ク。レ。タル。コ。ト。と。訓。と。れ。ど。此。を。阿良波事と對へる。名目語。不。れ。む。加久理基登。を。訓。ぞ。と。く。叶。牙。の。師。説。よ。此。幽。事。ハ。上。ノ。神。事。と。あ。る。を。一。事。よ。て。神事。を。言。の。ま。く。不。書。る。字。幽。事。ハ。意。を。も。て。書。る。字。不。書。る。故。二。共。加。微。基。登。と。訓。べ。し。舒。明。天。皇。紀。よ。幽。顯。と。あ。り。此訓。を。も。て。幽。事。を。か。こ。ぶ。と。訓。べ。き。こ。と。を。思。ひ。定。め。よ。と。有。れ。と。彼。紀。外。る。を。神。も。人。も。と。對。牙。と。る。故。よ。幽。を。カ三。を。訓。ま。む。ア。ラ。ハ。と。云。む。ハ。カ。ク。リ。と。云。ぞ。對。と。る。語。あり。る。熟。上。ノ。神。事。を。何。依。よ。同。じ。現。事。と。顯。事。神。事。を熟。思。ふ。べ。し。○幽事。そ。れ。事。を。一。ち。ま。ど。も。宇。都。志。事。不。加。微。事。阿。良。波。事。不。加。久。理。事。と。相。對。ふ。語。を。聞。え。る。也。○事。顯。事。と。二。つ。云。ひ。



書紀の此段よも、顯幽と訓けて顯明事とは、天下此人民を對へたるまめ思ふべし。けて顯明事とは、天下此人民茂平治賜ふ朝廷の方、此御政事よて、此を現人の顯も行ふ事あまば云、予ゆ、但し此を大とて云言あるが、小よ事へ、有也、亦万此業を行ふ事、ち、ち、既ふ天地立て、謂各くの手前よ付とる顯明事、此、此、既ふ天地立て、謂也、亦造化此道行ハレ、寒暑晝夜の來經往て年をちし、風火金水土の幸ひも、ちどく、備を、人草万物の生成て、草木も生茂、雨降り風吹き海川野山、此事までも、某よ掌る神ありて、世よある神事、此限りは、掌漏せる去を、を、無、無、産巢日、大神、此勅命以て、大國主神よ治せ、を、詔、予る神事、幽事と云は、如何ある事と云、ちらむと考

ふ、亦、謂もる造化の道、不係る神事、亦、非、天、津、神、は、更、亦、天、津、神、も、國、土、予、祝、予、亦、ま、と、世、亦、有、も、る、人、乃、此、世、を、過、て、幽、世、不、歸、と、ら、む、魂、等、を、此、時、ま、で、猶、い、ま、ど、主、宰、治、む、る、大、神、を、定、賜、ハ、ざ、と、し、故、亦、其、幽、冥、事、の、大、權、を、執、て、悉、く、統、治、せ、と、此、勅、命、よ、て、大、造、上、績、を、成、給、へ、亦、賞、の、賜、物、亦、ぞ、有、也、亦、其、を、書、紀、に、本、と、て、幽、事、と、書、れ、亦、よ、て、明、也、し、師、説、了、幽、事、と、を、現、人、の、顯、は、行、ふ、事、よ、亦、く、神、の、為、と、ま、ま、政、あり、と、言、れ、し、ハ、上、件、論、へ、の、謂、也、亦、造、化、此、神、此、神、事、と、隔、れ、く、混、を、ち、く、て、委、し、ら、む、故、亦、く、大、國、主、神、本、と、て、須、佐、也、男、大、神、此、宇、都、志、國、王、神、を、亦、れ、を、詔、へ、る、御、語、よ、依、て、其、事、を、し、心、予、含、み、て、前



小八十垵ハチヤウ手テ不レ隱レりて侍はむと白給シラレへ依事ヨシ不レしあまむ。  
速スミカよ唯カと申して今かく吾退アハカリテ而將治シラカク幽冥事リゴトヲと白給シラレ牙ハる  
ありぬ也ナリ。此等コノの事コトを第八十六段ハチジュウロクダンまゝと第百十五段ヒャクゴジュウダン  
より次ツギくよ往イキく云イハる説セツどもを考カウ合カフせて辨ワカふ  
ば弘仁私記コノありし以來ヨリ世ヨく此事コト識シ人多ヒトち此幽旨コノを見  
得エとるは無ナりし中ナカに纂疏サンソ不レ。顯事ケンコト人道ニヒトノミチ也。幽事ユコト神道カミノミチ也。人  
爲ス惡ハ於ニ顯明ケンメイ之地ノチ則スレバ皇誅スミレ也。爲ス惡ハ於ニ幽冥ユコト之中ノナカ則スレバ神罰カミバツ也。爲ス  
善ツ獲ル福フク亦モ同シ也。神事カミコト則スレバ冥府メイフ之事ノコト也。とあり也ナリ。おの文コトをい  
れバ委クくニ本書ホンショよハおは漢語カンゴ言イハへれズ信シ不レ明カらシ也。説セツ  
あり也ナリ。其コノ下シタに委クくニ云イハるを見るミべし。○岐神キノカミハ伊邪那岐命イセナキノミコト。  
豫美都固ヨミツクよ往坐イデマして伊邪那美命イセナミノミコトよ追オハれ給タマへる時トキに自ヨリ

此莫來コノナキツと詔ミコトノコトひて衝立ツキダテ給タマへる御杖ミツヱ不レ成坐ナラズる神カミあり也ナリと。  
既スデに見えと也ナリ。第二十二段ニジュニダンの傳ツタヘ見るべし。師ウチに此コノれルを  
委クくニはて今避給サリふよ此神コノカミなしも吾ガ不レ代りて從奉ツクべし  
とて經津主建御雷二柱ツクシノミノカミノイサノカミ神カミ不レ。藤フジ於給タマへる事コトをツクき由ユあり  
也ナリ。其コノ下シタに云イハるニ。第百二十六段ヒャクニジュロクダンの傳ツタヘを見て知チべし。○言訖コト而シテは伊比イヒ袁ヱ  
と訓ツケるも非ヒ許登袁コト閉ヘ氏ノミコトと訓ツケべし。祝詞イハヒコトに稱辭タテマツ竟ハといふ  
辭コト竟ハを同シく此コノを際サカイと言イハ竟ハとる意ココロバ牙ハに古言コノありて例コトあり  
はと有アリ也ナリ。○瑞ミツヤハ坂サカ瓊ニはこと天照大御神アマテラスノミコトの御裝束ミヨソビ  
ハ八尺ヤサカノタカ勾カ瓊ニとある處トコロに委クくニ註イ牙ハに也ナリ。第三十二段サンジュニダンに  
躬披ミカサハ眞龍マコノリが美豆ミツ加良カ登ノ伎キ氏ノミコトと訓ツケるに從ツクふ也ナリ。活字カクジ  
本ホンま



と一本、舊事紀おどお被とあるは依て、現因所知看せは  
負上義如被衣上被と説る説を誤あり。現因所知看せは  
御靈璽と御頸よ懸せはを因避給ふ信了。躬披て授奉也  
て皇美麻命を祝給ふて彼伊邪那岐大神の御頸珠を。  
天照大御神お賜へはと。同じ意バ牙乳也。彼廣矛も二  
牙ると思合。大倭神社註進狀お引とる舊記尔倭大因魂  
せて辨べし。大地主神以八尺瓊爲神體奉齋焉とあり。此の八  
坂瓊おはるし。其の彼廣矛を八千矛神を申は御名也。○  
八百丹八岡部翁説の如く。夜本ハ彌百を約と依語。爾を  
土此をよみて彌百と多く此土を杵して築といひ係と  
也。上は八穗米支豆支也御埼とも見えと也。第七十六  
段の傳見

はれ本雄畧天皇卷歌ふ。夜本爾余志伊伎豆伎能美夜と  
ある處も註を見るはし。○杵築宮としも云由也。下此  
傳ふて明らし。○長隱鎮坐矣ハ書紀ハ長隱矣と見え神  
賀詞には八百丹杵築宮爾靜坐支とあるを合せて文を  
成せはぐ。長と也。上至今鎮坐也ある如く。第九十九段  
神世の當時此宮お隱靜坐るはくも。今お至まざる御形を  
顯し給えぬを云。かくは依物を師の豫美都因よ避給へ  
靜留此義。○諸神等と也。因津神とち皆ハ云よ及バは天  
降坐はも。今まで此大神は御治坐る。諸神皆を云あるは  
し。○宮處ハ美夜古也訓はし。都字を美夜古と訓む。○參



集ハ。麻韋都杼比と訓べし。參と申き方と也。尊也。方へ  
參るを云語あまむ。此大神を尊みてかく申せり。○杵築  
也。故之。伎豆伎給比志故爾と訓べし。集給へる諸神の各  
各御手を下し。杵して宮地を築堅給。給子依由也。然る  
は今まで其御治を蒙れる故。此みあらば。此を後也。永  
永よ其御治を承る。乃ふ大神也。永永鎮坐。宮あまは。  
然も有べき神態也。崇神天皇卷よ。かの大物主神の神  
の御墓を。書ハ人作れるを。夜を神。出雲大社志。枝宮を  
此造れり。と有をも。思ひ合はべし。出雲大社志。枝宮を  
竝記せる處。杵那都岐有壇無社。諸神築大社時。會聚也  
地とあゆむ。其舊跡と聞えと也。四月三日と。十月朔日と  
此處を祭る式あり。そ

下よ云を。○杵築ハ。風土記出雲郡。杵築郷。郡家西北  
見るべし。○杵築ハ。風土記出雲郡。杵築郷。郡家西北  
凡八里六十歩とあり。前條よ。多藝志也。小濱とあり。古  
名。あべらむを。諸神の杵築と。乃へる地也。ある故。後杵  
築と號と也。と聞也。和名抄。小も。同郡。杵築と出と也。但  
今本よ。杵字許。誤れり。風土記抄。大神所坐也。今并宮  
内。越岬市。島中村。大土地。小土地。赤塚。假宮等。為杵築内。此  
外。兼合日。御崎。宇竜浦。佐岐浦。宇岬浦。湊園村等。為杵築郷。  
内。又。聞手。結濱。黒田等。杵築社。領七浦内也。杵築郷。古。出雲  
郡。今。神門。郡。八束水。臣豆奴。命。此。圍引。多乃。ふ處。小。支豆支  
也。といへり。八束水。臣豆奴。命。此。圍引。多乃。ふ處。小。支豆支  
也。御埼とあり。即此地。此埼。了。今。世。日。御埼と云處  
也。見。第七十六段。了。其。宮所。ハ。風土記。了。出雲。御埼山。郡  
家。西北。凡。七。里。二百六十歩。凡。今。の。三。里。高。二百六十丈。



周九十六里一百六十五步。西下所謂所造天下大神也。社坐也。とあり。眞龍云。郡家の方程を一本よ正北とあり。合え。西北七里云。方程合あり。今見るよ。山頂も。杵築大社の北。山殊よ。秀とあり。抄ふ。此山周凡高。三百六十丈は。此処を度れる。あらむ。今十六里有餘也。古事記。宇迦山也。俗呼曰不老山。又鰐淵山是也。西北以郡家路尺考。土相應。杵築。今彌山跡。是宇迦第一峯也。といふ。宇。風土記訂正本よ。古事記よ。謂ゆる。八十六段。宇迦山の。此師説よ。鰐淵山是あり。有をを合せて思ふよ。連る山。て。峯の別よ。立とる。故よ。名の。変れる。ぬり。但し。風土記抄ふ。熊成。け。て。神名式。出。峯といふも。是あり。と云へる。ハ誤あり。け。て。神名式。出。雲郡よ。杵築大社。大神。同社大神。天后神社。と竝載され。と。あ。本。此外よ。同社とあり。社六社あるを。其を既。了。第一。段。第百三段。第百四段。第百十五段。あ。ど。此傳よ。舉。と。り。

大神。天后神とは。彼須勢理毘賣命あり。この天后神と云。御女。三穗津姫。あらむ。と云説ハ。非。ぬ。也。其。御紀。ふ。仁壽元。由。之。第百二十八段の傳よ。云を見べし。御紀。ふ。仁壽元。年。九月。庚午朔乙酉。特擢。出雲。因。熊野。杵築。兩大神。竝。加。從。三位。貞觀元年正月。廿七日。奉。授。出雲。因。從。三位。熊野。神。杵。築。神。竝。正。三位。同年五月。廿八日。授。出雲。因。正。三位。勲。七等。熊野。坐。神。正。三位。勲。八等。杵築。神。竝。從。二位。同。九年。四月。八。日。出雲。因。從。二位。勲。七等。熊野。神。從。二位。勲。八等。杵築。神。竝。授。正。二位。とあり。熊野。を。須。佐。也。男。大神。ふ。坐。あ。ぞ。既。ふ。云。也。第七十九段。第九十。一段の傳。見。る。べし。杵築。ハ。大。因。主。神。よ。坐。こ。と。古事記。書紀。出雲。風土記。因。造。神。賀。詞。あ。ぞ。ふ。て。明。あ。也。然。る。を。叙。紀。よ。大。社。



者素盞鳥等、大己貴命也、鎮座也。と云るを誤あり。こを舊事紀よ、素盞鳥等、坐出雲、罔熊野杵築神宮と云るを誤れり。て、神祇令、義解あども、此よ依て誤れ、依説どもあり。古書よ、杵築ふ須佐之男命を祭ること、見ざる事あり。若、二神を祭らば、神名式よも二座と有るべし。ちて杵築き字や、猶師の記傳よ辨られざるを見ばし。ちて杵築此宮作<sup>ミヤツク</sup>正<sup>マサ</sup>ハ、いせ上代<sup>カミツヨ</sup>了<sup>ヨシ</sup>は、縦横御量<sup>タテヨコミ</sup>千尋<sup>チロ</sup>栲繩<sup>カクノ</sup>百結<sup>ヒャク</sup>く。ハ十結<sup>ジュウ</sup>く下<sup>シタ</sup>てと有れむ。皇美麻命の大宮と異あむ。大あ正<sup>マサ</sup>らむ事<sup>コト</sup>を更<sup>マシ</sup>ふるも云ハ、交<sup>マシ</sup>垂仁天皇此御世<sup>オホキミ</sup>ふ。宮造<sup>ミヤヅク</sup>し給へ依<sup>ヨ</sup>時<sup>トキ</sup>も。前<sup>サキ</sup>よ天皇此大御夢<sup>オホミ</sup>ふ。修理我宮<sup>シウリガミヤ</sup>如<sup>ゴト</sup>天皇<sup>オホキミ</sup>也御舍者<sup>ミヤノサヘ</sup>云く。と御託し坐るよ依てぬまむ。猶神世の制を用ひ給らむを。其後ふを漸くふ。其制の替<sup>カ</sup>まりと聞ゆ。そは齊明天皇紀五年の處此末<sup>オヘ</sup>す。是歲命<sup>セト</sup>出雲罔造<sup>イツクニシノカミ</sup>、修<sup>シウ</sup>嚴神<sup>イツクニシノカミ</sup>也宮<sup>ミヤ</sup>。

也<sup>コト</sup>のるハ。釋紀<sup>シヤクキ</sup>ふ。嚴神<sup>イツクニシノカミ</sup>也宮<sup>ミヤ</sup>謂<sup>イハレ</sup>杵築神宮<sup>キキノミヤ</sup>也。也<sup>コト</sup>のる如<sup>ゴト</sup>あるの。そを伊勢風土記<sup>イセフウツチキ</sup>よ、員弁郡<sup>ミヤノ</sup>ふ。孰賀師<sup>ニギハヤシ</sup>神社と云ぐありて。祭神<sup>マツリカミ</sup>を大己貴命<sup>オホニギハヤシ</sup>也と有を思合せて知べし。杵築大社<sup>キキノミヤ</sup>記<sup>キ</sup>。齊明天皇五年<sup>サイメイテンノイハヒ</sup>ふ。出雲罔造<sup>イツクニシノカミ</sup>よ命せて。神宮<sup>ミヤ</sup>を修造<sup>シウゾウ</sup>せしむり。世々<sup>ヨリヨリ</sup>公より建給ふ。此時の罔造<sup>イツクニシノカミ</sup>此名<sup>コノナ</sup>を日本紀<sup>ニッポンキ</sup>よ。闕名<sup>クヅナ</sup>とあれど。罔造<sup>イツクニシノカミ</sup>の系譜<sup>ケイポ</sup>を考ふると云。正<sup>マサ</sup>大社<sup>オホミヤ</sup>志<sup>シ</sup>ふ。此を齊明天皇の五年七月<sup>サイメイテンノイハヒ</sup>此事<sup>コト</sup>と志<sup>シ</sup>て。本社<sup>ホミヤ</sup>即<sup>ソレ</sup>日隅宮<sup>ヒノサキノミヤ</sup>是也。祭<sup>マツリ</sup>大己貴<sup>オホニギハヤシ</sup>大神<sup>オホカミ</sup>。社<sup>ミヤ</sup>高<sup>タカ</sup>八丈<sup>ヤツタテ</sup>。濶<sup>ヒロク</sup>六間<sup>ムツノマ</sup>。四方<sup>ヨシタテ</sup>各<sup>ノノ</sup>一間<sup>イツノマ</sup>。半<sup>イツノマ</sup>天井<sup>テノ</sup>画<sup>エ</sup>雲<sup>クモ</sup>。齊明天皇<sup>サイメイテン</sup>以前<sup>イマノマデ</sup>從<sup>ツグ</sup>天神<sup>アメノカミ</sup>也制法<sup>シヨウホフ</sup>。齊明天皇<sup>サイメイテン</sup>也時<sup>トキ</sup>定<sup>マシ</sup>正殿<sup>マサノミヤ</sup>式<sup>シキ</sup>後世<sup>ノチノヨ</sup>以<sup>ヨリ</sup>不法<sup>フホフ</sup>其制<sup>コノシヨウホフ</sup>謂<sup>イハレ</sup>假殿<sup>カミヤ</sup>と有もて知<sup>チ</sup>る。高<sup>タカ</sup>八丈<sup>ヤツタテ</sup>。濶<sup>ヒロク</sup>六間<sup>ムツノマ</sup>。四方<sup>ヨシタテ</sup>とあるを。齊明殿<sup>サイメイノミヤ</sup>式<sup>シキ</sup>を聞えたり。此<sup>コノ</sup>天皇<sup>テンノウ</sup>此<sup>コノ</sup>御舍<sup>ミヤノサヘ</sup>此<sup>コノ</sup>如<sup>ゴト</sup>しや云むや。甚く小<sup>コ</sup>く定<sup>マシ</sup>給へ正<sup>マサ</sup>此<sup>コノ</sup>頃<sup>トキ</sup>ハ。中大兄<sup>ナカオホノノ</sup>皇子<sup>ミコ</sup>と藤原鎌子<sup>フジワラノカミコ</sup>連<sup>ツグナ</sup>と。専ら漢<sup>マン</sup>風<sup>フウ</sup>を用<sup>ヨウ</sup>られ。如<sup>ゴト</sup>此<sup>コノ</sup>頃<sup>トキ</sup>ありし。ちて此<sup>コノ</sup>よ正<sup>マサ</sup>後の事<sup>ノチノコト</sup>は。奏<sup>ソウ</sup>し行<sup>ユク</sup>ひて。如此<sup>ゴト</sup>や定<sup>マシ</sup>められらむ。ちて此<sup>コノ</sup>よ正<sup>マサ</sup>後の事<sup>ノチノコト</sup>は。



日本紀畧よ。後一條、天皇長元四年此處ふ。八月十一日。今日出雲、因杵築社、神殿顛倒。十月十七日。出雲、因言上、杵築宮、无故顛倒也。由、閏十月三日。軒廊御上。去、八月十三日。出雲、杵築、神殿顛倒事也。百鍊抄よも、此事を載して、次よ、或記云、閏十月三日、有御上、兵革疫疾者、宝殿中奉納、御正躰、筥頗出、自宝殿、御坐、顛倒、大殿上云々とあり。五日。今日奉幣、出雲、杵築社、被申去。八月十三日子刻、神殿顛倒事。十五日。發出雲、因杵築社奉幣使、神祇少祐、大中臣元艷等也。と見え。其の顛倒

え、百鍊抄よ、出雲守橘俊孝配流、佐渡、因是、杵築社顛倒、并、有、神託、由、秦、聞、仍、遣、案、檢、使、也、無、案、也、故、也、と、あり、此、紀、畧、の、文、に、倒、字、を、脱、し、百、鍊、抄、に、ハ、例、字、を、脱、せ、り、然、依、ハ、上、よ、奉、と、る、四、年、八、月、の、處、に、正、し、ハ、例、字、を、脱、せ、り、然、正、此、は、人、此、正、目、よ、見、る、事、れ、ま、た、偽、を、奏、ま、べ、く、も、非、交、殊、よ、下、ふ、大、社、志、字、引、く、如、く、九、年、正、殿、式、あり、此、顛、倒、の、故、と、聞、也、然、れ、バ、神、殿、顛、倒、の、事、ハ、達、無、れ、と、其、例、を、奏、せ、る、由、を、託、宣、り、し、と、申、せ、る、が、無、案、あり、依、て、流、さ、れ、る、由、を、託、宣、り、し、其、罪、名、の、中、に、稱、託、宣、授、官、位、於、人、と、し、其、方、よ、由、あり、て、あ、る、物、を、ま、か、く、る、偽、を、奏、せ、る、事、も、一、字、を、脱、せ、大、社、志、に、後、一、條、院、長、元、九、年、正、殿、式、と、り、依、る、は、右、に、顛、倒、に、依、こ、す、聞、え、と、也、此、を、正、後、ふ、は、百、鍊、抄、に、後、冷、泉、院、天、皇、の、康、平、四、年、十、一、月、廿、九、日、出、雲、因、杵、築、社、顛、倒、と、見、え、五、年、二、月、廿、二、日、諸、卿、定、申、出、雲、大、社、顛、倒、



事と何也。下引く康治二年三月の宣旨も、康平五年も造営よと大社志も、後冷泉院治暦三年正殿式と何は此時あり。長元九年より三はと鳥羽院、永久三年正殿式を何り。治暦三年より四十九年もある。下引く康治二年の宣旨も、天仁三年も、莊園不科せて其勤字致せる由見えたる也。此造営も依てあり。然るに此時よいともしみじき神の御稜威あむ有る依そ、ハ下引く宣旨も、帥中納言家保云く、ちて此後、近衛院、天皇此康と何る処、不注を見べし。

治元年六月、神殿顛倒何也。此事も下引く康治二年有よて知られとり、永久三年より今年まで、三十一年あり。百鍊抄も、崇徳院、天皇の永治元年正月七日、杵築大社俄顛倒とある也。此を誤れるあり。そを永治二年ハやグて、近衛院、天皇の康治元年よて、永治元年と一年の違あり。故ま、假殿を作りて遷し奉れり。そを大社志も、康

治元年十月十四日、可造立假殿。由被下日時、勘文同十一月廿一日戌時、假殿遷宮、兼忠執行也。と何るうて知るは、下引く宣旨も、十月頃上奏也。斯て同二年、三月十日、左辨官と出雲、因下され、多依宣旨も、彼社者天下無雙也、大廈、因中第一也、靈神也、顛倒也、時非宣旨者、無始造営。此文よるも、是をり前も、往仍前く造立之時、莊園平均、嚴下、材木所令勤仕也云く。此云くと約するてある所を、莊園よて彼是、申加也。師中納言家保任造営せざる由を、尤免給へる文あり。

棟柱桁、更不採、虹梁也、材木、然而莊園同心及三箇年所造也。間有神也、告大木百本、自海上寄社邊、以其大木等、用梁



畢也云く。お上り記せる永久三年正殿式の時の事よ  
よ三箇年が不ど宮みて造畢と依由あり其木此寄れる  
む下文よ謂ゆる天仁三年よぞ有る依其木此寄れる  
ふ帥中納言家保日記を引て天仁三年七月四日よ大木  
百本海上より稲佐浦に流寄れりあく不因幡上宮の近  
辺よ長十五丈口一丈五尺の大木一本寄來る在地此人  
民疑を成ちがら是を切取むと依るよ大蛇件木を纏ひ  
て居る病故よ諸人恐れて退き然依不伐取むと計し  
者ども病苦よ腦まさ依ること頻ありなれ種くを祈  
をちし依り御示現よ云く出雲大社造立の毎度よ諸  
圀の神とち行事とある今度ハ我が行事よ當り然御杖  
木を採進り畢然仍て件木一本を我が得分あり此木を  
以て急ぎ吾が社を造立まほしと示し給ふ稲佐浦の寄  
木了て正殿の造營せり永久三年十月廿六日迂宮あり  
是を寄木此造營と云と何也此此宣旨の文まよ大社志  
よ鳥羽院永久三年正殿式とあるよ熟符へり最も畏き  
御稜威ありなり因幡上宮やハ神名式不法郡不宇倍  
神社名神大とある神あるべし永万記不上宮とあれバ  
あり今も稻葉郷宮下村と云処の宇倍山と云ふ在と云

子り祭る神を建内宿祢命よて圀の一宮あるが是まよ  
御稜威いみじき神あり此を人せとれりての神あれど  
幽入坐てた大圀主神よ從ひ給ふこを如此しれ本此  
神社のこと委くた仁徳天皇卷七十六年此処よ注べし  
彼社邊造營者當境第一也大事也。是以自往代以來莊園  
一同所致其勤也。是數代也舊規也。近則康平五年天仁三  
年也例也。中古如此。別於當時乎云く。康平五年ハ治曆三  
科せ給へる例天仁三年も永久三年正殿式此營ミ茂科  
せ給子依例あり是をもて近とあり委く上よ論へる  
如抑件社。去年六月顛倒也間。即注子細令言上也。處僅遺  
實檢也官使及營造也沙汰作事遲引神慮難測。仍十月頃  
上奏也刻適被勤下假殿拜採枝木始木作日時等云く。此  
よ依て康治元年六月よ神殿顛倒ありしことまよ大社  
志了其年の十月よ假殿の沙汰あてて十一月よ迂宮あ



りしと云ふも、共よ正説  
あることを知られり。造同社間、被停止、神社佛寺納官  
封家、濟物責、并諸司所、切下文、及官行事、藏人所、召物者  
偏勵、當時造營、土勤固、遂後年、究濟土節、云々。依宣行之と  
の也。此全文ハ、おちいと長々れバ、此よちいとく約めて  
奉これむ、委くむ大社志よ就て見るべし、他書ハ  
見ざる宣然まぢも此頃、神を蔑如し、思ひ奉る世中、お  
し故小や、お布事行はまび、是と也、一年おきて、久安元  
年十月四日、同因へ下されり。左辨官の宣旨よ、彼社  
顛倒之時、蒙重任、宣旨、所造營也、因家也、寄誠、異他社、爰當  
任之、吏同蒙、宣旨、之後、營土木、之處、權門庄、く、土課役、以對  
捍爲事、豐饒之昔、猶有煩于造畢、凋弊之、今偏勵私力、不日

造畢、輸之、吏逾可謂、大功云々。依宣行之と也。此宣旨も、  
大社志よ  
載るるをり外、おち莊園の課役を科せて、造營し、勉むと  
見ゆ所あり。爲給ふ事行ハれざる故、成功をも多勸られ、あり。  
神慮い、うよ有む、測の、と、し、け、て、此、後、の、事、ハ、考、ふ、る、便  
いと悲しき世中、あり、る、也、ち、て、此、後、の、事、ハ、考、ふ、る、便  
あり。大社志よ、高倉院、安元元年十一月十九日、假殿遷宮  
とあり、其間二十年、は、の、ゆ、は、如何、お、御、坐、ら、む、此、安、元、元  
年、と、り、十、六、年、あ、り、て、後、鳥、羽、院、建、久、元、年、六、月、二、十、九、日、  
正殿式遷宮と同志よ見ゆ。おは鎌倉と也。諸因の莊園、お  
科せて造れる由、下り引く文よ見えとゆ。おち扶桑見聞  
私記ハ、文治五  
年六月十五日、出雲、因杵築、大社、神主、資忠、云、者、此、程、参、向  
鎌倉、而、依、有、御、立、願、之、事、今、歸、参、本、社、可、抽、丹、誓、之、由、被、仰



含、土間、今日上道被付、神馬一匹、号、沢井黒、御廐、土馬也、云、  
云、とあるを思ふ、此頃ハ頼朝御世の大なる事、種々、  
望ありし時、あれバ、彼資忠が來れる、立願、此事を仰せ、  
含め、其事の叶へる故、莊園、課役を科せて、正殿式の  
造立せられ、儲、まゝ大社志、後堀河院、嘉祿三年六月二  
十四日、假殿式遷宮とあり、建久元年より三十七年の後あり、此時此事を  
同志、建久、初源、頼朝、科、諸州、莊園、以、新大社、民庶、大困、嘉  
祿、末、北條、準、其法、復、以、新大社、既而、柱面、得、十六、蛀字、守護  
佐、く、木信濃、前司、泰清、告、此、於、鎌倉、令一、宛、此事を記せ  
して、因司、右衛門、尉、北條、氏、驚、異、遽、發、官庫、金穀、更、造、大社  
昌綱、と云、名、も、あり、後、人、稱、其、文、爲、蠹、符、と云、ひて、居、大、煩、物、朕、非、素、意、若、人、歸、  
德、栖、高、木、足、ぎ、い、ふ、文字、載、せ、是、信、あらば、最、も、畏、く、辱

ぬき神語、師の玉勝間、此を因造家記、よある、  
由、人、小、聞、たり、とて、舉、られ、  
此、此、を、後、世人の漢意、よして、神、此、御心、非、  
大、神、此、請、白、し、給、へ、依、御言、と、表、裡、お、ま、む、あり、  
神、漢、文、を、も、か、ば、り、作、さ、る、程、ぬ、ら、む、  
の、下、よ、あ、る、べ、き、上、よ、あ、る、ハ、拙、し、然、れ、ば、  
條、ふ、諂、ひ、て、造、れ、る、言、と、こ、所、  
思、ゆ、ま、と、言、ま、お、ま、ぎ、一、偏、ぬ、り、  
然、る、は、神、世、小、御、居、所、を、  
天、皇、命、の、御、舍、此、如、く、と、請、白、し、給、ひ、  
天、皇、祖、神、の、御、量、よ、  
も、千、尋、繩、を、し、百、結、く、八、十、結、く、と、定、賜、へ、る、は、  
は、然、有、る、物、字、次、く、小、さ、く、造、  
世、の、亂、う、ち、續、き、て、諸、州、の、民、此、甚、く、困、  
課、役、を、科、せ、お、る、事、を、いと、愛、み、坐、て、  
所、思、看、せ、依、よ、や、是、ぞ、神、此、御、心、此、時、  
の、状、も、從、ひ、給







動流<sup>ス</sup>血<sup>ト</sup>と云事 此後至慶長以假殿式營十餘度今不具錄  
も見えと云 制本殿高示文六尺方王間周以八尺縁謂也假殿式寛文  
七年三月晦日遷宮源家綱公賜鈞旨造營制依正殿式と  
見えぬ也 此文ある示文の二字を六丈の誤あるべく王  
杵築大社記よ此宮に餘社を替りて正殿南向ひ柱を  
九本何れも丹青に彩りて神勅と異あるに似たり階を  
昇れど正面の障子に當社の地圖を金彩色に写し左の  
障子には競馬を繪き昇殿して左を廻り同殿西に向へ  
る故に人を東に向ひて拜むいづる故に社の高さ  
七丈以上を御正殿と云ひ七丈以下を御假殿作と云ふ  
り正殿を大營ある故に正殿假殿 ○佐香河内は風土  
うはるく造立ありといへり 記よ楯縫郡佐香川源出郡家東北所謂神名槌山東南  
流入于海とある川の内方ありと聞ゆ 風土記抄よ佐香  
川佐香郷小堺村

川也といふ ○百八十神を多々此神等を云こぞ既小註す  
第百十九段の ○御廚ハ和名抄ふ廚庖屋也久利夜と  
傳見るべし 伊都閉黒益也とある伊都閉を神武天皇  
紀に嚴菟此云怡途背と見えと依嚴菟あるの黒益を岡  
部翁説よ益を借字よて辭あり薪して焼ば黒くぬる故  
に飯を炊くをかく云依れぬ 田舎人あどの鍋は  
けて此を神御食炊くを云ふあるはしを有依りおき  
て眞龍説よ久利夜を久呂麻志夜とて呂志に約す利あり  
す云す然も有はし ○百八十日は多々日數多あり  
し哉大雁より云へ依れ也 ○喜燕而阿曾備氏と訓べ



し。此を大國主大神の功成竟て。現世を隠避り給ふ時お  
まば大神は更あす。百八十神等も共よ喜ばして酒を  
醸し。父酒壽ひし給へすと通えとす。○解散坐を。眞龍が  
阿羅那麻志と訓るふ依はし。阿羅那てふ語の義は既ふ  
云す也。第二十二段のけて此時集坐る神とち。悉のれら  
び大國主大神と共に御身を隠し給ふむこと。言はくも  
更れぬ。其を傳ふそ無れ。言代主神。建御名方神あぞの事  
を思合せ解散とある字。熟く想像して辨ふべし。○佐香  
は。風土記了。楯縫郡よ。佐香郷。郡家正東四里六十歩。云々  
をのめ。此云くと約とるを。即和名抄よも。同郡よ。佐香と  
あす也。

出とす。風土記抄よ。并小佐香。惠佐香。園村。鹿音寺。四  
所。為佐香郷。燕會処。今佐香。小川也。といへり。あ  
風土記了。同郡よ。佐香濱。廣五十歩とあるは。佐香川の濱  
あるは。抄よ。俗云坂。まゑ在神祇官とあるは。社中よ。佐  
加。社あす。神名式了。同郡よ。佐香神社を有る。即是あり。此  
時集坐る。百八十神とちの御靈を祝へ。依社外に。風  
記抄よ。佐香。浦九社。あす出雲風土記とあり。此大神よ由あ  
大神也。といへり。依傳ども。依撫ひ記さば。仁多郡よ。布勢郷。古老傳云。大神  
命之宿坐處也。故云。布世。神龜三年。意宇郡よ。穴道郷。所造  
天下大神命也。追給猪像。南山有二。一長二丈七尺。高一丈  
五尺。高八尺。追猪犬像。長一丈。高四尺。其形爲石。无異猪犬  
周。丈一尺。追猪犬像。長一丈九尺。其形爲石。无異猪犬。



至今猶在故云穴道。真龍云。おち大因主と成給ひて。遊獵  
おまど地名よ穴とあれハ。志くや訓べし。大社記云。はと  
天平の頃まで有し。今土よ埋れとる。見え。はと  
神門郡ふ吉栗山所造天下大神宮杖造山也。此を後世ま  
を造る所と定。とる山あるべし。抄ふ此山を伊秩郷一窪  
田村中久利原あり。山足よ阿陀加夜怒志命社ありと云  
戸はと宇比多伎山大神也御屋也。この山ハ抄ふ在朝山  
日女命与大穴持命也社俗呼曰宇比滝大神とあり。稻積山  
るよ依れバ彼比賣神と住坐る御屋化まる。う稻積山  
大神也稻積也。稻山大神也御稻也。陰山大神也御陰也。梓  
山大神也御梓也。冠山大神也御冠也。おぞ見え。抄ふ上五  
宇比多伎左右前後山名也。とあり。真龍云。此郡を殊ふと  
く大神の事を傳へとま。此所を大神の始。此宮所ある  
ばし。宇比多伎北南よ神所と云。村も有て神戸あり。試り  
云は。大神の避。坐て後の祭。或るを櫛八玉神櫛よ化て。

云くと有を思ふ。宇比多伎ハ。鷯火焼よて。櫛八玉神御  
屋を竈よて。其火炬屋の山とあり。稻積山ハ大神の和  
稻荒稻よ多積置とる食物。此山とれ。陰山ハ天此御蔭  
日の御蔭と隠り給ふ御蔭の山を。お。梓は御執し物。其  
梓を保己山を。お。冠ハ御装物の。ま。飯石郡ふ。三屋郷  
冠。此加夫利山と化とる古傳よ。ま。飯石郡ふ。三屋郷  
郡家東北九四里所造天下大神也御門。即在此處故云。三  
刀屋。神龜三年。即有正倉と見也。三刀屋を御門屋の義お  
ふ通をして用ふ地名の。此正倉ハ同郡の在神祇官と云  
例。お。かくのおとし。此正倉ハ同郡の在神祇官と云  
る社の中。御門屋社とある。即是。お。神名式了ハ。三屋  
神社と。お。風土記抄ふ。三屋郷給下村一。ま。大原郡ふ  
神原郷郡家正北九里古老傳云。所造天下大神也御賊積  
置給處則可謂神賊郷而今人猶誤云神原郷耳。と見え。真龍



云神賤て御執し物を始として神の御  
物をいふが中よ神宝を専ら兵器なり。同郡の在神祇官  
と云ふ社の中よ神原社と云ふ神名式よ神原神社と  
載さゆ。風土記抄よ神原郷神是等此傳を見通して此大  
神の現世此御稜威も比類無<sub>レ</sub>しと想像奉るは故  
是を以て神魯岐神魯美命の大詔命もて幽世此大權治  
看<sub>レ</sub>大神とは定賜へ<sub>レ</sub>む。斯て爰よ猶<sub>レ</sub>深<sub>レ</sub>く。顯事幽事  
此有状を索<sub>レ</sub>茲<sub>レ</sub>稽<sub>レ</sub>ふゆよ。人此か<sub>レ</sub>現世よ生<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>るよとは  
伊邪那岐伊邪那美二柱大神の事始<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>るをゆ次<sub>レ</sub>  
ふ。誰教ふとぬ<sub>レ</sub>。自然<sub>レ</sub>此ごと傳來<sub>レ</sub>ある道<sub>レ</sub>ふて。父母の賜  
物<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>ぞ。其本を云<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>きは。二柱此産巢日大神此産

靈よ頼<sub>レ</sub>て成<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>るよとあ<sub>レ</sub>ゆ由は。初<sub>レ</sub>精<sub>レ</sub>く云<sub>レ</sub>る如<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>ゆ。  
此事ハ第一第二第三段ま<sub>レ</sub>第十二段あ<sub>レ</sub>す。既<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>現世  
どよ委<sub>レ</sub>く注<sub>レ</sub>せるを考<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>せて辨<sub>レ</sub>ふべし。 既<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>現世  
よ生<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>。其現事顯事治看<sub>レ</sub>。皇美麻命の御治を畏<sub>レ</sub>み  
て。己<sub>レ</sub>身よ好<sub>レ</sub>くも悪<sub>レ</sub>くも。其御制度よ從<sub>レ</sub>ひ。産靈大神此  
分賦賜<sub>レ</sub>へる。正<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>死<sub>レ</sub>眞<sub>レ</sub>性<sub>レ</sub>のま<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>。敬<sub>レ</sub>みて。上<sub>レ</sub>  
ゆ<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>。下<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>を愛<sub>レ</sub>しみ。各<sub>レ</sub>某<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>。屬<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>職業<sub>レ</sub>を  
營<sub>レ</sub>み。神の御徳を探<sub>レ</sub>て。現事神事此わ<sub>レ</sub>ち。世中此道理  
をも學<sub>レ</sub>び辨<sub>レ</sub>ふる事ハ。人の常道あり。此を纂<sub>レ</sub>疏<sub>レ</sub>ふ。顯事人  
道也。と言<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>す。但<sub>レ</sub>し此<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>の常<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>を云<sub>レ</sub>ある<sub>レ</sub>が  
畧<sub>レ</sub>を云<sub>レ</sub>る。大國主大神此現世よ坐<sub>レ</sub>す。間<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>そ<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>み<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>  
へる御業よあら<sub>レ</sub>ひて。太上<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>を。世の<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>よ。



徳を施し、其次あるを功を多て、其次を世にめ人の為  
とあるべき事を書遺し、天地の神に功徳を称述て、其  
化育に参るばかりの功業を成を神習ふ人の大業とを  
云あり、然まど此を尋常に人の容易く行ひ難き事ふし  
有まむ、上りて其加て、年老期至りて死まむ、形體ハ土  
常を語れるあり、かくて、カ歸り、其靈性を滅ること無れむ、幽冥に歸きて、大國主、  
大神に御治り従ひ、其御令を承給はせて、子孫ハ更あゆ、  
其縁ある人々をも、天翔に守る。是ぞ人の幽事ふて、産靈、  
大神の定賜ひ、大國主、神の掌給ふ道ある故よ、纂疏し、幽  
事、神道也と言ふと通也。あ弘く神道と云せハ異あ  
混ふべ、ちて人此性を初よ委く云る如く、産靈、大神に靈  
性を分賦賜へる物ふし有まば、元よ至善し死を世了

彼、妖神邪鬼の如く有て、左右よ世の道字亂し、人字其黨  
小誘入れむと計りて、人の心入率に、彼善死性の外あ  
る、邪ある心字扱け、悪行を勧むるを、人此義を悟らば省  
て改め、其悪行に顯あれむ、君上よ是字誅し給ふ、纂  
疏し、人為悪於顯明之地、則皇誅之、と宣ふは、是あ也、人  
性を元より至善しき物ある由を猶云は、各其某よ、  
善惡に義理を知れる故、其口よく善惡の義理をい  
ひ別扱を、其口よ云ごとく、非安て、祕し善惡の義理をい  
ひ別扱を、其口よ云ごとく、非安て、祕し善惡の義理をい  
疑ふし、固有の正しき性の外よ、邪さま入、率れ、心行  
ぬる故よ、邪心邪行と云あり、然れども、自造る惡と云べし、産  
靈、大神の賦賜へる命よ、反き奉るれど、皆非れ也、然を  
惡と云ひ、或を善惡の別あし、と云、依あど皆非れ也、然を  
有れど、濃く率りてハ、謂ゆる習ひ性の如くありて、惡心



悪行とも思ざるあり。まに中よむ眞此理を知。こと能ハ  
劣。悪心悪行と知。さゆを諭せども悟らざる。何正。是を謂  
も。る。変よて妖魅の類あるべ。けて君上を。いうよ。聴く明  
れ。れ。常をもてを語らま。び。けて君上を。いうよ。聴く明  
ふ。坐せども。現世人は。儆ふし有まむ。人の幽る思ふ心を  
更。あ。正。悪行よても。顯よ知られざゆハ。罰むること能ハ  
び。善心善行も顯あらぬを。賞給ふことを能ざるを。幽冥事  
を治。給ふ大神ハ。其をとく見徹し坐て。現世に報をも賜  
ひ。幽冥よ入るる靈神の。善惡を糾判ちて。産靈大神の命  
賜へる性。了。反。ゆ。罪。犯。を。罰。免。其。性。の。率。よ。勉。免。て。善。行  
あ。正。し。は。賞。み。給。ふ。纂。疏。よ。人。爲。惡。於。幽。冥。中。則。神。罰。也。  
爲。善。獲。福。亦。同。也。と言。す。ゆ。を。是。れ。ゆ。也。但し。此。を。纂。疏。の。説  
よ。依。て。始。免。て。思。ふ

ことよむ。非。妄。今。かく。天神の。勅。命。よ。と。り。て。頭。事。と。幽。事  
を。分。り。て。皇。美。麻。命。を。頭。事。ハ。掌。給。ふ。を。現。ふ。そ。此。御。政。を  
見。る。小。現。人。の。善。き。を。賞。み。惡。き。を。罰。免。給。予。也。幽。事。を。治。  
給。ふ。大。神。此。幽。冥。よ。行。ひ。給。ふ。御。政。も。亦。の。あ。ら。び。如。此。く。  
善。よ。福。を。賜。ひ。惡。を。罰。免。給。む。何。事。を。治。む。き。理。あり。若。然  
ら。び。と。せ。む。幽。事。治。看。び。と。云。を。何。事。を。治。む。御。政。の。無。せ  
む。必。皇。美。麻。命。の。頭。事。を。掌。給。ふ。御。政。よ。對。へ。ゆ。御。政。の。無  
て。む。此。の。傳。よ。叶。む。さ。る。こ。を。熟。く。想。察。る。は。し。但。し。世。よ  
人。死。て。は。其。神。消。失。せ。て。知。お。と。あ。き。物。の。如。く。思。予。も  
何。り。其。を。忌。じ。き。非。あり。其。由。を。鬼。神。新。論。よ。委。く。辨。予。と  
る。を。見。け。て。上。件。論。へ。ゆ。事。ど。も。は。善。を。必。福。あ。正。惡。を。必  
罰。ある。平。常。に。道。理。を。述。る。よ。こ。そ。有。れ。現。世。に。有。趣。を。見  
れ。む。此。道。理。の。如。あ。ら。で。善。人。に。禍。事。よ。逢。お。く。世。を。終。正。  
惡。人。に。幸。福。を。得。て。世。を。終。ゆ。類。を。いと。多。の。正。此。を。何。か  
ゆ。謂。う。と。ゆ。事。れ。ら。む。と。云。よ。是。ま。と。彼。妖。神。邪。鬼。ど。も。此。



所爲よあむ有れば。この妖神邪鬼の始ハ伊邪那岐命の  
成まること。第二十三段小見え。其処此傳小季云云。云  
第四十三段第九十六段。第六段の傳おどよも往云  
へりき。おむ此段の上下よ見え。まよ第百。然めあらむ。  
二十六段よも季々注ふを合せ考ふべし。  
幽事治はる大神此さる妖神どもの所爲を厳禁  
給ふべき。許し置給ふは。何ある御心あらむと云  
了。言まくも綾よ畏く。尊く辱き謂れも有る。其を大  
主神。それ若く御坐せ依時よ。庶兄弟八十神とちハ勢有  
し。いと御自ハそれ從者とれゆて。帝負給ふばかり勢あ  
く。甚く令苦られ給へ依事。例此妖神ども。八十神の心  
小率正。あはしの勢氣をたて。大主神を令苦とるよ

て。此を今世も。惡き人此幸福を得て。善人字災難よ値  
しむると同じ死を。八十神と口相とる。惡心を發し給え  
ば。然る勢あき中よも。善事小いそしみ。其ちかの八十神  
免を欺きて。苦しめとるを。大主神ハそれよ替りて。免  
の苦みを救ひ給へる。一事を以ても。善事小いそしみ給  
へる事。ちて豫美都。困小逃到。正給ひては。須佐之男。大  
神。元と正愛く思ふ。御心は有。おがら。態と強面。おく。正  
て。種くよ。苦し。災驗み給へるを。聊も遁れ。空辭ま。其災  
難を受給ひ。お。斯て上津。困。逃還。正給ふ時。須佐之男。  
大神。豫母。都平坂。まで。追到。坐て。庶兄弟者。追撥。爲。大主  
神。亦爲。宇都志。困玉神。と諭。給。牙。お。は。ふ。く。庶兄弟。此。八



十神をば追撥給へまぜ。現世よ御坐らば。因作の大造  
也。功績よ苦しみ給へるおと。上り取總て云ふが如し。第  
二十一段の傳故是。依て考ふゆ。妖神邪鬼ども此邪  
お依態ハ憎うれど。其態やぐて。人ふ實の徳行を磨き成  
まむる方ふ益有まば。姑く宥死て。見行し給ふ事と所思  
ぬ。其趣を思ふ。現世の悪る者ども。上よも其悪行  
きて。其者ども多用ひ。人草此善惡を伺しめ。或を隠へる  
者を捕へし。給ふ事も。ゆるを。猶其行を直さる。遂  
よ誅おひ給ふ。御政よ似と。依趣あり。まよ此よ就て。猶思  
ふ。天地の間ある物の。い。う。よ。悪きも。大。の。と。を。人。の。用  
と。ある。事。と。思。は。る。そ。を。世。此。為。人。此。為。よ。一。向。ふ。枉。事。を  
れ。安。枉。神。邪。鬼。さ。へ。よ。其。態。の。や。ぐ。て。人。ふ。案。の。徳。行。を。成  
志。む。る。方。よ。益。有。れ。バ。あ。り。此。を。其。本。を。尋。ぬ。る。伊。邪。那  
岐。命。の。愛。し。き。青。人。草。を。生。殖。し。て。其。人。草。よ。用。有。る。事。此

み功しみて。神まよ万物も生給ひて。左もき右も死物  
し給へる事の因よ。枉神も成たれむ。其枉態も。枉態おが  
らぬ。人此用と。然るは已命。加此須佐也男。大神ふ。甚く令  
苦らまて。逃還。已給ふ時。彼大神此御語。爲大因主神。  
亦爲宇都志因王神。と詔へるよ。前ふ苦死給へる事を  
吾が徳業を勵さむ。や。驗み給。予は御態あり死。と始死て  
知。多。了。ひ。此時よ。已以前。予ハ。須佐也男。大神。吾を愛み  
御魂。至。の。弓。矢。琴。お。ど。を。取。持。し。は。と。彼。八。十。神。と。ち。ふ。令  
て。逃。給。へ。る。予。て。知。ら。れ。と。已。は。と。彼。八。十。神。と。ち。ふ。令  
苦。ら。れ。し。も。皆。そ。れ。徳。操。を。磨。死。成。せ。る。益。有。已。し。事。を。も  
悟。已。坐。て。須。佐。也。男。大。神。の。已。命。を。教。へ。立。給。予。は。御。態。よ  
倣。ひ。て。人。を。も。現。世。ハ。有。徳。人。と。お。れ。幽。冥。よ。有。功。神



也も爲ナレグもとの御意よて。勵ガまし導ミ給ふと態ワザと強面  
扱ナレて。善人を苦スむるを救スむに殃難ワザハヒも遭アへども猶  
其志を變カさ依イや不イを驗コみ。其過ワザをも罰キタ給ふ。其を  
徳トク字勉ツメむる人といふ。或モは小過コワザ勿スきこと能スざれば  
亦モ也。賜マと希スよむ善人をも。或モは救スひ給ふ事もあり。賞を  
傲オウらむを救スむを思スひ給ふ。先マに賞を賜マは。福を得てハ  
と。神の野ノは矢を射ヤ入れて取トり。四方シヨウより火ヒを放ナす。給スへる  
を思スふ。予ヨも顧コみ給スは。大名持命ナナノミチノミを驗コみ。所トコロを爲ス。終マつ  
命を失シふも。あるを救スひ給スは。終マつ。其徳を畢マし  
め給スふ。は。常ツネ人ト。成ナり。進ス給ス。假福カフク字與ユふ依  
を。其儘シ見ミ行ユ。事コトを。常ツネ人トといふ。小善コゼンあきま

能スざれど。其字報カい。の於オ其假福カフクも依イて。倍ハく其傲オウも募ツる  
う不イをも驗コみ給スふ。是コトぞ幽冥カウリヨノホカミ大神オホカミの人を眞マコトに徳行  
ふ進ス給スて。眞マコトに福を得スし。給スふ。幽事カウリゴトは本教ホトツケあり。依イて  
とや上ウの件ケンの説セツハ。神事カミコトの中ナカに幽事カウリゴトを。白シし。顯アるに説セツし  
有アれ。巴ハ神カミは所トコロ思ス看ミさむ事コトの空カラ恐オソろし。か。記キし。於オこ  
も。身ミの毛モウ堅ツて。覺カ也ヤ。世セ人ヒトは。餘ヨリに。白シし。顯アるに。道ミチを。辨ワカへ。ざ  
依イて。憤ウレろし。く。慨カく。て。恐オソろ。世セ人ヒトは。餘ヨリに。白シし。顯アるに。道ミチを。辨ワカへ。ざ  
大御神オホミカミと。ち。篤胤ツクノが。身命ミノミコトハ。既スに。大オホ神カミと。ち。よ。奉ホウりて。其御  
道ミチの。字ジ。謂イハふ。世セ人ヒトは。普ツく。知チし。め。む。と。瞬マタタビく。間マヒも。忘ワスレれ。依イて  
事コトあ。く。此コノ字ジ。謂イハふ。世セ人ヒトは。普ツく。知チし。め。む。と。瞬マタタビく。間マヒも。忘ワスレれ。依イて  
加カく。白シし。顯アるに。奉ホウる。こと。の。過ワザ。勿スき。志シを。哀アハレむ。と。照テ覧ランし。て。  
大御心オホミココロよ。神直カミナカ日ヒ大直オホナカ日ヒを。聞ク直ナカし。見ミ直ナカし。坐イマスし。  
て。宥ユ給スへ。恕シし。給スへ。と。恐オソみ。恐オソも。記キし。於オこ。は。と。世セ人ヒト  
人草ヒトクサの。幸サイありて。富トモと。依イて。大オホの。と。傲オウ遊ユも。耽タムりて。徳行トクコトを  
勉ツメむる。グ。少コトあ。依イて。幸サイれ。貧ツツし。死シす。身操ミサヲ守モトメす。徳行トクコト字



強む。依も多死を以て。此本教の尊きおを。辨へ知依。依  
し。是を以て漢籍も孟子も天將降大任於是人也。必先  
苦其心志。勞其筋骨。餓其肌膚。空乏其身。行拂亂其所為。  
所以動心忍性。曾益其所不能。云々。とも云へり。信ふさる  
言あり。然れど富人ふ德行をあら者め希よ。有る貧人  
よ。傲遊を好みて。貧しき故よ。罪を犯者も多う。ま  
む。上よ。謂ゆる言ども。大凡の常。殘語れる。あ。故  
れ。少。然ると。多死を以て定むる。現世の富ま。幸  
依も。眞の福よ。非。眞は殃の種。依の多加。其富  
が故。罪を造て。幽世よ。現世れ。貧は。幸あきも。眞の殃  
入て。其罰を受け。バあり。現世れ。貧は。幸あきも。眞の殃  
ふ。非。眞。眞。福の種。然る。多加。故。罪を造ら。徳行  
を強。幽世よ。入て。其賞。受。バあり。但し。多。人。此  
中。神の恵。富。幸。更。言。神の  
罰。貧。幸。抑。徳行。苦。幽世。入  
る。今。論。ふ。の。ぎ。非。抑。徳行。苦。幽世。入

ては。永く大神乃御賞を賜て。用ら。依。是を眞。福と  
いふ。傲遊。不。恥。し者。幽世。入。永く大神の御罰を  
蒙りて。棄ら。依。是を眞の殃。といふ。總て思ふ。善。惡。既。不  
分。功。と。罪。を。定。り。て。善。を。賞。み。惡。を。罰。む。る。ハ。幽世。大神  
の。大。權。よ。て。輕。重。遲。速。れ。差。こ。そ。有。れ。其。善。惡。不。適。ふ。賞。罰  
を。行。ひ。給。む。と。云。お。と。無。れ。ど。現。世。よ。其。賞。罰。を。見。こ。と  
能。む。幽。世。不。歸。り。て。後。不。判。給。ふ。纂。疏。不。冥。府。也。事。を  
宣。へ。る。は。是。あ。也。儲。ま。と。此。世。の。樂。を。幽。神。の。有。功。人。よ。酬  
罪。人。よ。殃。と。稱。ふ。と。稱。ふ。よ。足。ら。不。此。世。れ。苦。も。ま。と。有  
惡。の。報。を。果。し。給。ふ。今。其。概。畧。を。云。は。幽。世。よ。至。り。て。後。其。善  
く。を。其。人。此。善。惡。を。叶。む。ま。し。て。其。隱。せ。る。徳。の。輕。重。不  
合。む。や。う。於。世。の。權。を。柄。る。人。此。賞。罰。む。る。よ。偏。私。を。行。ふ



も有はくとし公平あらむも其當り否然と多々目と耳  
此及べる所のみよて庸人の慣として憎む所あれば其  
善を隠し惡を揚げ耀奕る者をバ其惡を隠して善を揚  
れバ上のみあらび己もまた己を掩ふ善者といよ徳  
他人ののみあらび己もまた己を掩ふ善者といよ徳  
何れバ弥く隱去多々隱ののみあらび我や我が徳を覺  
えざるれり惡者の滋く惡きた滋く匿去多々匿ののみ  
あらび我と己が惡を覺えざるれり善者惡者ともし人  
と己を知らばた現世ハ誰り此を褒貶誰り此を賤さ  
む此を知るは多々幽世大神のみ徳を姑く報いて盡さ  
或惡も暫く容して報い或幽世入るを待て審よ判り  
給ひて後よ其靈の成行を定まる事ハ但し此事ふも  
種々の別ありて此処よ盡し難る事ハ鬼神新論靈然  
此みむしら妖魁考あどろ委く記せるを見べし然  
ば德行志有らむ人むとく此義を辨了て日くふ其念  
を行と殘自省み自責て人は何と誹め何と譽るとも其  
ふ愧拘ハる事れく唯幽冥大神は更ふ也凡て神の照覽

し給ふ所を此み愧畏みて其德行を磨く是を神教小習  
ふと云邪也。思ひ幽行を惡意の如く思ふもあり或ハ我  
が好意をもて物去るを惡意の如く思ふもあり或ハ我  
の思わざる事を思へりといひ為ざる事をめ為と正と  
あて譽も誹もはる物あまむ其ハ心と為るよ足らば想  
むぬを想ふと云は眞鳥住む宇奈提の杜此神し知さ  
む無交名ぞや人ハ云て有ぬべし心此問はけいあ  
答へむ神を直よ此心をけりよ照覽去む況て其行の  
善惡ハ更れ凡て神の御聖を金石よまで含まれむ所  
とあて至らぬ隈あく人此心も坐と云むも強言よ非  
実其の上よ云る如丸人此心も坐と云むも強言よ非  
れバ是と思ふを顯をし非と思ふを幽さむと思ふ其是  
非を知らぬ心やがて神の賜物あらば既よ神よ知られ  
るあり其幽せし心行を知て幽冥より治給ふ故よ幽  
事治去神とハ申は然ま幽見え何と秘し奉らむ幽と  
顯との別をしも顯をり幽を見え何と秘し奉らむ幽と  
徹しある物をやされど隠は事も無てを叶む幽世中あ  
がら其む人此為よこそ為へるれさ依を人の隠せる事



をバ言ひも顯たし吾が事多しも隠さむと云ふぞ大凡  
の人此常ある已が事よて隠はばきむ夫婦の睦び已が  
身よて隠去ばきハ情處のみと知べし此等ハ隠は  
ぞ神の道ぬる此を除て隠さむをける事大りと善  
らぬ事おほくし其を人よそ隠しもせ然る我吾は神  
免神おしも得隠し奉らむやも穴うしこ  
道お奉仕也徳行を勉むまぢぬ如此しも苦難お遭ふを  
神の知らば顔お御覽は如何ぞや徳行の事を思は交  
世利をれみ思ひ行ふ人は幸ある物をやあぢ羨み思ひ  
其方よ赴死おむた道お信心うけき故に憐むるし其人  
はや彼妖神邪鬼よ率られて神お御愛みお漏はくれ也  
此よいけり神の御心よ徳行を勉むる人と傲遊びま  
よ世利おどよ聰る人とを見行さむ意む子お思ふよ譬  
ば人の子を二人持とらむよ一人は賢くて遂よ功成  
き性よ見え一人を愚ふて遂に功成まじ死性よ見とら

むよ賢きをば倍く賢く功成しめむと責諫絶或を打も  
あて閑おく教立むよ愚あるをぞ更よ責諫むる事おく  
心倦よ棄置とら年お愚れは幸ありむ喜びおむを賢  
きが教らゆと苦しむと其教よ依と死ハ功成て世  
おも用飛る免るを彼愚あるを世の廢人よやれらむ  
然るをかの賢死が中頃よして父此吾をのみ責諫むら  
事を苦み恨み彼愚あるが責られざる我羨みて彼を眞  
似び彼が如く成とらむら其父いりよ口惜りらざら  
免や彼八十神を教ふる神の無りし故お幸得とりと傲  
正にむ字須佐也男神の御教を承とらへる大國主神の  
苦み給へる趣上よ云依如くあるを八十神ハ遂よ棄  
れ大國主神を大造也績を立て幽世の大神としも成と  
るへり人お何を取むとけるまよ今二人の奴を  
とらむよ一人は案およく功しめ事ふるを一人を左右  
お骨折ある事をバ彼案あるよ為しめて自は旁くこと  
無らむお其主よ人の心よ何を愛く見らむ神の徳  
行を勉むお人と傲遊よ耽る人とを見行はもまよ如  
し是をよもて徳よ勸む人此苦き多く傲し耽る人此姑  
樂しきよ抑此世を吾人の善惡死を試み定賜をむ爲ふ  
と知べし











言し終給ふ諺よあも有らば。今まで世の事識人どももの  
大社よ神此参り給ふを云  
まとを非ありとて生さうしらふ種々論抑十月加牟  
子る説ども多うれぜ凡てとほよ足らば  
那月と云まとは神嘗祭はる月ある故よ神嘗月と云る  
を畧死て加牟那月と云ほよ就て万葉を始終神無月を  
も書とす。あ不月名のことと神武天皇 然るふ上古よす。  
此月を天下此諸神大社よ集給ふをいふ諺の有し故す。  
案は神嘗月の借字ふかける神無月此字を中世をゆ正  
字よとす。世間よ神此在ぬ月あまば神無月と云を出  
雲因むのゆえ神在月と云ふを云る説の出来よけむ。  
お月を正しく神のおき月とあて詠る哥を新続古今集  
よ逢ふことを何よ祈らむ神無月をり侘しくも別れぬ

るうぬとあり何の月ありとも出雲因むり餘り神無し  
といふ月此有終や抑神此奇し死む大社の大神を更よ  
も申さば其宮よ御坐しおきも出雲よまれ何所おまれ  
御霊を後おふも分ちて往坐し何処よはま往坐しおき  
も猶其宮を離れ給えは是神の奇霊お坐まは所あり但  
しいとく御心よ應ハざる事ありて其宮を去給ふこと  
め有る事 古く十月よ諸神の大社よ集ひ給ふと云る説  
異あり。は和歌童蒙抄よ十月は五神とち出雲因へおはし坐よ  
依て神無月を云といひ。此抄ハ藤原範兼終の書るよ  
因よは鎮祭月と云を記させ給ひ藻塩草よも神無月を  
出雲因ふを鎮祭月とも神在月とも云と記し下学集よ  
もかく詞林采葉抄よ万葉七ある歌の神無月といふ語  
を解て一天下此神無月をば出雲因りハ神在月をも神  
在月とも云我朝の諸神よ此月参集給ふ故あり其神在



此浦ふ神々來臨此時を小童此作れる如き篠舟波上よ  
浮ぶこを算數も及ぼのらび諸神ハ神在社ふ集給ふお  
の神在社此神號をバ佐太大神と申は是を大社此傳奏  
此神よて座とや云ひ此餘みお布種く云る説ども  
あれど皆古を知らざる非説ぞ  
もあれぞ記し出ははと佐太社古縁起といふ物よも日  
本書よ就て見らしはと佐太社古縁起といふ物よも日  
本国中大小の諸神まゑ異国此諸神も毎年十月うは當  
社牙來集也給ふ此故了他国よを十月を神無月と名お  
け當国よを神在月と號也社の傍ふ鞍挂松をて三拱は  
かこの立木あり二日頃とて枝を垂はく残以て神の來  
臨と知るおははと四日より十日まで此間を川水米を

洗牙水アラの如く白く流はくおをのり此を神く此酒を  
造り給ふ故おと云傳ふ今云こは上ある佐香郷の故  
事お由ありげなり其川を佐  
香川よハ十一日とめ大社牙參とらひ十五日ふ大社  
非さありて天下此諸神此邪正まゑ人間此善惡を別ち給ひ今云  
大社  
志よ十五日の処よ大御供祭諸神とあ十七日よ神在社  
るを此参り給へる諸神の祭あるべし今云大社志  
十七日御供同  
牙移也給ふ二十五日まで退散し給を今云大社志  
十七日御供同  
夜神等去出神事自十一日至十七日毎  
年異国とめ此獻  
為神在齋云とあるよよく合へて海の泡を聚  
て  
物よ二蛇あり其形尋常此蛇とは異てて海の泡を聚  
て  
て箱の如く此を包みて惠積の津よ著お蛇此背ふ龜  
甲輪違此紋あり今云大社志よ錦紋也小蛇出杵築海江  
号也竜蛇長尺餘具大社也紋龜甲とあ







重の籬を放れて出るおや有れむ。天下よ凶事ありと云傳ふ。今云。おや異国イコクの神カミ此殘留りて。枉害マダシをぬ去事サテをきと歸る時トキとよ。障神祭サマシノマツリをぬし給ふ式シキあることハ。いとも尊ウツクシき古式コシキありり。此事コトを既スデに第二十二段ダイニジュニダン此傳コトよ云。おや布フ第百二十六段ヒャクニジュニダンの傳ツトヒ。此夜コノヨふ。神原カミハラといふ原ハラにて。神カミよも云ふを見るべし。此神樂カミガクあり。遇タケよ。其音コトをきく者モノあれども。身ミ此コノと。免宜マシから。然事シカドコトありとて。二十五日ニジュイニチ此七時コノナナトキと。所トコロの者モノハ。戸ドをけして出デ出デ。今云イマニヒト。おや此国コノクニの神等カミナリ此喜コト燕ヒし給ふある。山ヤマく。まよ。おや神カミ社ヤおや。時トキく。あは事コトハ。尋常スグナの人ヒトは。此コノを天狗テング囃ハシとぞ云イハる。二十六日ニジュウニチ此朝コノアサ明アカふ御立ミタテあり。其後ミナトよ。大社オホヤシロふても。佐太サタ社ヤシロふても。社人ヤシロノヒト各オノオノ手テよ。梅木ウメノキの枝エダを以もつて。社地ヤシロノチをうち拂ハラふ。異国イコクの神カミく。はと

卑ヒ死シ神カミおど。此殘コノ居イるおとも有アれむ。追立オヒタツ依ヨ神事カミコトあり。今云イマニヒト。大社志オホヤシロノシ。十七日ニジュウイチニチ夜神等ヨカミナリ去出サシデ神事カミコトとあるハ。大社オホヤシロに参マカれる神等カミナリを送オウるおや。聞キゆるをまよ。二十六日ニジュウニチ夜神等ヨカミナリ去出サシデ神事カミコトとあり。此コノ謂イハは。當国トコノクニにて。四月シツキをも神在カミアリ月ツキと云イハる。攝津セツ国クニ住吉スミヤカ神カミハ。諸神シロカミの來臨キリし給ふ時トキ也。国家クニノミヤの守護シヨクゴとあて残りて。明年アサトシ此四月コノシツキ十一日ユヅロニチよ來臨キリある故ユヅ。十月トウグツ此如コノカドカく。神事カミコトを執行コトヲシふ。此字コノジ以もつて。毎年トシトシ二度ニヒお。神在カミアリと云イハる。お。大社志オホヤシロノシ。其枝社エダノヤシロを載オカる。大社オホヤシロ時トキ會聚カヒ也地チとありて。十月朔日トウグツノシラヒよ。祭マツリ。杵那都岐ウヅナツキといふ行事コトあり。こを彼諸神カノシロカミの集カヒ。給オクふ。と云イハる。杵那都岐ウヅナツキといふ。四月三日シツキノミカドの行事コトも。祭マツリ。杵那都岐ウヅナツキを。住吉スミヤカ神カミの來り給ふ。云イハる。杵那都岐ウヅナツキと云イハる。諸神シロカミ築キ。大社オホヤシロ時トキ會聚カヒ也地チとあれ。神等カミナリま。於オ此所コノトコロよ。來給キリふ。古例コノコトよ。よれる。神祭カミマツリを聞キゆる。又マタ是コノお。扱オシて考カウ







母<sub>イ</sub>て坐ま<sub>ル</sub>故<sub>ニ</sub>諸神の<sub>イ</sub>ちて此<sub>レ</sub>と<sub>ニ</sub>次<sub>ク</sub>。大<sub>國</sub>主<sub>大</sub>神  
集<sub>ニ</sub>給<sub>ル</sub>由<sub>ニ</sub>云<sub>ル</sub>を<sub>レ</sub>非<sub>ニ</sub>あり。を<sub>レ</sub>祭<sub>ル</sub>る<sub>御</sub>社<sub>を</sub>記<sub>し</sub>出<sub>ば</sub>。ま<sub>だ</sub>神<sub>名</sub>式<sub>ヲ</sub>。彼<sub>杵</sub>築<sub>大</sub>社<sub>此</sub>  
上<sub>ノ</sub>も。大<sub>穴</sub>持<sub>神</sub>社<sub>。風</sub>土<sub>記</sub>。意<sub>宇</sub>郡<sub>ノ</sub>。布<sub>自</sub>奈<sub>大</sub>穴<sub>持</sub>神  
社<sub>。風</sub>土<sub>記</sub>よ<sub>レ</sub>。多<sub>布</sub>自<sub>奈</sub>社<sub>也</sub>と<sub>あり</sub>。抄<sub>。は</sub>と<sub>野</sub>城<sub>神</sub>社<sub>の</sub>  
次<sub>ノ</sub>。同<sub>社</sub>坐<sub>大</sub>穴<sub>持</sub>神<sub>社</sub>。此<sub>社</sub>も<sub>風</sub>土<sub>記</sub>。神<sub>門</sub>郡<sub>ノ</sub>。多<sub>伎</sub>神  
社<sub>此</sub>次<sub>ノ</sub>。同<sub>社</sub>大<sub>穴</sub>持<sub>神</sub>社<sub>。此</sub>社<sub>も</sub>風<sub>土</sub>記<sub>。播</sub>磨<sub>國</sub>粟<sub>郡</sub>  
小<sub>伊</sub>和<sub>坐</sub>大<sub>名</sub>持<sub>御</sub>魂<sub>神</sub>社<sub>。名</sub>神<sub>大</sub>。○御<sub>紀</sub>よ<sub>。貞</sub>現<sub>元</sub>年<sub>正</sub>  
神<sub>從</sub>四<sub>位</sub>下<sub>元</sub>慶<sub>五</sub>年<sub>六</sub>月<sub>九</sub>日<sub>。授</sub>播<sub>磨</sub>國<sub>從</sub>四<sub>位</sub>下<sub>。勲</sub>  
八<sub>等</sub>伊<sub>和</sub>坐<sub>大</sub>名<sub>持</sub>御<sub>魂</sub>神<sub>正</sub>四<sub>位</sub>下<sub>。と</sub>見<sub>也</sub>。百<sub>鍊</sub>抄<sub>よ</sub>。平  
治<sub>元</sub>年<sub>八</sub>月<sub>二</sub>日<sub>。陳</sub>定<sub>播</sub>磨<sub>國</sub>伊<sub>和</sub>社<sub>燒</sub>。事<sub>と</sub>云<sub>事</sub>  
も<sub>あり</sub>。今<sub>レ</sub>姫<sub>路</sub>の<sub>町</sub>中<sub>に</sub>在<sub>て</sub>。岩<sub>神</sub>と<sub>申</sub>ひ<sub>や</sub>ぞ。大<sub>和</sub>  
國<sub>葛</sub>上<sub>郡</sub>小<sub>大</sub>穴<sub>持</sub>神<sub>社</sub>。今<sub>朝</sub>町<sub>村</sub>や<sub>云</sub>よ<sub>在</sub>て<sub>。三</sub>輪<sub>明</sub>神  
宮

と<sub>レ</sub>ぬ<sub>し</sub>。吉<sub>野</sub>郡<sub>小</sub>大<sub>名</sub>持<sub>神</sub>社<sub>。名</sub>神<sub>大</sub>月<sub>次</sub>新<sub>嘗</sub>○御<sub>紀</sub>よ<sub>。貞</sub>現<sub>元</sub>年<sub>正</sub>月<sub>九</sub>日<sub>。奉</sub>授<sub>。神</sub>  
と<sub>ぞ</sub>。大<sub>和</sub>國<sub>大</sub>己<sub>貴</sub>神<sub>正</sub>一<sub>位</sub>と<sub>見</sub>也<sub>。臨</sub>時<sub>祭</sub>式<sub>大</sub>名<sub>持</sub>御<sub>魂</sub>神<sub>。神</sub>  
也<sub>あり</sub>。今<sub>レ</sub>妹<sub>山</sub>と<sub>云</sub>よ<sub>在</sub>て<sub>。川</sub>原<sub>屋</sub>村<sub>と</sub>云<sub>よ</sub>。屬<sub>り</sub>と<sub>ぞ</sub>。  
津<sub>國</sub>菟<sub>原</sub>郡<sub>大</sub>國<sub>主</sub>西<sub>神</sub>社<sub>。帳</sub>考<sub>小</sub>今<sub>在</sub>西<sub>宮</sub>村<sub>と</sub>云<sub>へ</sub>り。  
よ<sub>立</sub>せ<sub>れ</sub>ハ<sub>西</sub>宮<sub>と</sub>云<sub>よ</sub>。後<sub>崇</sub>光<sub>院</sub>御<sub>紀</sub>よ<sub>。應</sub>  
永<sub>正</sub>六<sub>年</sub>六<sub>月</sub>九<sub>日</sub>。抑<sub>大</sub>唐<sub>蜂</sub>起<sub>事</sub>有<sub>沙</sub>汰<sub>云</sub>。出<sub>雲</sub>大<sub>。應</sub>  
社<sub>震</sub>動<sub>流</sub>血<sub>云</sub>。又<sub>西</sub>宮<sub>荒</sub>夷<sub>宮</sub>震<sub>動</sub>と<sub>筑</sub>前<sub>國</sub>夜<sub>須</sub>郡<sub>小</sub>。  
の<sub>る</sub>西<sub>宮</sub>ハ<sub>是</sub>り<sub>。あ</sub>不<sub>よ</sub>く<sub>考</sub>ふ<sub>也</sub>。筑<sub>前</sub>國<sub>夜</sub>須<sub>郡</sub>小<sub>。筑</sub>  
於<sub>保</sub>奈<sub>牟</sub>智<sub>神</sub>社<sub>。去</sub>を<sub>神</sub>功<sub>皇</sub>后<sub>の</sub>新<sub>羅</sub>國<sub>を</sub>征<sub>給</sub>ふ<sub>時</sub>。了<sub>。三</sub>  
輪<sub>神</sub>の<sub>御</sub>心<sub>ふ</sub>。正<sub>し</sub>故<sub>。刀</sub>鉾<sub>あ</sub>ど<sub>奉</sub>り<sub>て</sub>。祭<sub>り</sub>給<sub>ひ</sub>し<sub>。う</sub>  
ば<sub>軍</sub>衆<sub>自</sub>み<sub>集</sub>へ<sub>め</sub>。是<sub>ふ</sub>依<sub>て</sub>立<sub>給</sub>へ<sub>る</sub>社<sub>あ</sub>。正<sub>し</sub>。香<sub>く</sub>ハ<sub>彼</sub>  
御<sub>段</sub>小<sub>出</sub>る<sub>。大</sub>隅<sub>國</sub>贈<sub>於</sub>郡<sub>。大</sub>穴<sub>持</sub>神<sub>社</sub>。御<sub>紀</sub>よ<sub>。寶</sub>龜<sub>九</sub>  
を<sub>見</sub>る<sub>也</sub>。大<sub>隅</sub>國<sub>贈</sub>於<sub>郡</sub>。大<sub>穴</sub>持<sub>神</sub>社<sub>。御</sub>紀<sub>よ</sub>。寶<sub>龜</sub>九<sub>。甲</sub>  
去<sub>神</sub>護<sub>中</sub>大<sub>隅</sub>國<sub>海</sub>中<sub>有</sub>神<sub>造</sub>島<sub>其</sub>名<sub>曰</sub>大<sub>穴</sub>持<sub>神</sub>至<sub>是</sub>。為<sub>。是</sub>  
社<sub>と</sub>見<sub>也</sub>。或<sub>書</sub>よ<sub>。桑</sub>原<sub>郡</sub>國<sub>分</sub>鄉<sub>よ</sub>在<sub>て</sub>。大<sub>穴</sub>持<sub>命</sub>少<sub>彦</sub>名<sub>。為</sub>  
命<sub>大</sub>歲<sub>神</sub>を<sub>祭</sub>れ<sub>り</sub>。此<sub>處</sub>よ<sub>神</sub>造<sub>島</sub>と<sub>云</sub>あり<sub>。今</sub>小<sub>島</sub>と<sub>も</sub>。  
ま<sub>と</sub>宮<sub>瀨</sub>と<sub>も</sub>云<sub>よ</sub>。は<sub>て</sub>拜<sub>殿</sub>小<sub>大</sub>穴<sub>持</sub>命<sub>や</sub>云<sub>ふ</sub>額<sub>を</sub>打<sub>と</sub>。







